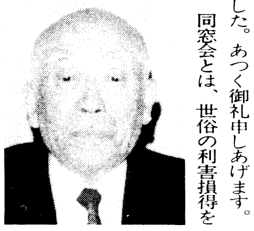
秋高同窓会だより

発行者
秋田県立秋田高等学校
同窓会
印刷所
秋田マイクロ写真印刷㈱

役員改選さる

小玉孝次郎氏（大7卒）新会長に!!

前会長　蓼沼　銀治郎（T8卒）



会員の皆様のご協力をいただいて、お陰様で楽しく同窓会の会長という重責を果たすことができました。あつく御礼申しあげます。同窓会とは、世俗の利害損得を超えた純粋な敬愛と友情のつどいであります。百周年を期に盛り上がった会員の皆様の、同窓会によせる関心とご協力は目覚ましいものがありました。今年は創立百四年目にあたりますが、同窓会の活動はいよいよ活発になってまいりました。心から会員の皆様に敬意を表するものであります。

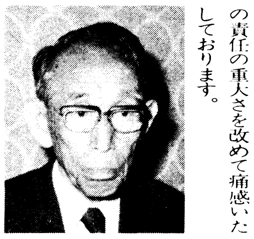
秋高同窓会が、まさに順調な進展を示していることは、毎号の「同窓会だより」が如実に示しております。私がお邪魔した各地区の支部の皆様の活躍ぶりを拝見いたしましても、まことに頭の下がる思いをするとともに、あたたかい激励を全身に感じた次第であります。ご厚情本当にありがとうございました。

さて、この度、一身上の都合で会長を退かせていただきました。何とぞ、老人のわがままとしてお許しくださるようお願いいたします。

幸い小玉新会長は、人物、識見ともにすぐれ、加うるにすこぶる健康に恵まれた方であります。同窓会の前途はまさに洋々たるものがあります。これからは私も及ばずながら一会員として喜んでご協力申しあげる所存であります。

会員の皆様、どうも長い間お世話になりました。本当にありがとうございました。

会長　小玉　孝次郎（T7卒）



今回、はからずも秋高同窓会の会長の席をけがすことになり、その責任の重大さを改めて痛感いたしております。

顧みますと、同窓会が設立されたのは大正四年八月であります。私はその時秋田中学三年生に在学中でありました。初代会長は児玉実徳校長で、副会長は岡忠精先生でありました。それ以来約六十年の星霜を経て、学制も変り、母校の世帯も大きくなるに従い、会員数も次第に多くなっています。

私は大正七年に卒業して同窓会に入会、以後会員として現在に至りました。今、会長として特別に抱負というようなものも持ち合わせませんが、歴代会長のあとを承ってどれだけのことが出来るか深刻に反省いたしているわけであります。

この上は、自分なりの力を尽くして、目覚ましい活躍をなされた蓼沼前会長のお仕事を継承して行きたいと、心から願っている次第であります。

会員の皆様のより積極的なご協力をいただいて、秋高同窓会を末端にまで血の通った若々しい生命共同体として成長発展させたいものであります。

会員の皆様、母校を思い同窓の連帯を念じて、力を結集しようではありませんか。

どうかよろしくお願いいたします。

前々から一身上の都合で辞意をもらされていた前会長蓼沼銀治郎氏から、常任理事会に対して正式な辞意の表明があったが、常任理事会では代表を派遣して慰留につとめてきたのであった。ところが蓼沼氏の辞意はすこぶる固い。あたかも任期（二年）満了の改選期を迎えた八月の総会において報告、常任理事と各年次の代表とによる銓衡委員会を設けることを提案、満場の賛成を得て、委員会は銓衡の全権を委託された。九月三日銓衡委員会開催、慎重な審議を経て、新会長小玉孝次郎氏が決定となり、副会長大嶋民治(S8)、辻兵吉(S19)の両氏は留任となった。

蓼沼前会長は、百周年記念行事、事業を故古村会長の代行として成就、同窓会活動の中心としてその組織化と連帯協調の盛り上りに尽力されるところまことに大きいものがあった。会の運営が渋滞することなく常にスムーズに明るく行なわれたことは、氏の円満にして洒脱な人間味の発露によるものであろう。「蓼さん、蓼さん」と老若の会員から敬愛された蓼沼氏を新しく顧問としてお迎えすることになったのはうれしいことである。

小玉孝次郎新会長は今までも同窓会の会合にはよく出席されており、また蓼沼前会長同様に県市の経済界に重きをなしておられるので、その温厚誠実な人柄と、その明敏適切な判断力、行動力についてはご存じの方も多いはず。大方の会員の期待の集まる所以であろう。

新役員紹介

副会長	大嶋　民治	（S・8）
	辻　兵吉	（S・19）
	小田島邦夫	（学校長）
顧問	佐藤　六蔵	（M・41）
	蓼沼銀治郎	（T・8）
監事	佐藤貞之助	（T・12）
	銭谷象二郎	（S・14）
	小玉順一郎	（S・20）
幹事	松本源太良	（T・11）
	小西達四郎	（T・12）
	石井　秀雄	（S・3）
	花岡　泰雲	（S・5）
	石川　健一	（S・17）
	村上　十郎	（S・19）
	小玉　康延	（S・31）
常任理事	佐藤治三郎	（T・6）
	刈田　文雄	（T・7）
	渡辺不二男	（T・8）
	今村久吉郎	（T・10）
	大野　博通	（T・13）
	菅野　秀雄	（T・15）
	丸ノ内　久	（S・2）
常任理事	志田　豊吉	（S・4）
	中安　正衛	（S・6）
	貝沼　研造	（S・8）
	小国敬二郎	（S・9）
	三浦　敬一	（S・10）
	小沢　雄象	（S・12）
	石田　秀一	（S・13）
	小泉　重雄	（S・15）
	菊地　茂	（S・16）
	小玉得太郎	（S・18）
	佐野謙一郎	（S・20）
	蓼沼　陸郎	（S・20）
	高橋　昌一	（S・21）
	辻　悌五郎	（S・27）
	長野　佳司	（S・29）
	工藤　雄一	（S・31）
	伊藤　民雄	（S・35）
	鎌田　寿	（S・42）
	後藤　一	（S・43）
（学校）	一関　吉美	（S・14）
	成田　朝春	（S・18）
	梶原　忠郎	（S・19）
	小松　彰	（S・19）
	山谷　浩二	（S・20）
	藤田　幸雄	（S・23）
	神田　勉	（S・25）
（事務局）	大槻　家静	（S・13）
	植村　久美	（S・37）

恩師ご健在

▼岩井徳祐先生（漢文）

"砲弾にくづるる盧山のあはれなる" "二秒の差あやふき命救ひけり" などと応召して中国戦線にあり、さかんに句を作って陣中便り（中支戦線ところどころ・"イモと兵隊" "クソと兵隊" "シラミと兵隊" など）を「羽城」に寄稿しておられた岩井先生（通称イワイッコ）を懐かしみ、早速短信をお願いしてみた。ひどくおよろこびの様子であった。語っていただこう。

○明治三十六年の生れです。

○秋田中学には昭和六年四月から昭和十五年七月まで在職した。たまたま自作の「俳句と戦線」をNHKから朗読放送したのが縁で、高知県立中村中学へ転出し、更に県内の海南中学（現在の小津高校）へ転勤、教頭職から校長代行職（戦後学校長追放のため）を勤めたが、日教組と合わず、公立をやめて私立の土佐高校の教頭に転じ、在職七年六カ月、入試問題の漏洩から校長に代って引責辞職して上京、私立の宝仙学園高校の一介の国語教師として平凡な余生を楽しんだ。やがて学園紛争から教頭にかつがれ、以来八年、真言宗宝仙寺の大僧正の学校長を補佐して、齢七十四才を数えながら矍鑠、定年もなく、現職に生き甲斐を感じています。

○現在の学園に在職二十二年余、無欠勤という健康状態です。

○帰宅したらテレビニュース、たまにナイターを楽しみ、晩酌もたしなまず、九時過ぎには就寝、朝は夏冬を問わず午前四時には起床、読書や書類の整理などに耽ります。

○秋中在職中の忘れ得ぬ印象は、昭和十二年九月、応召にあたり、一千有余の秋中健児全員に秋田駅頭で万歳の歓呼に送られた記憶、忘れやらず。

○趣味と強いて申せば、ナイターに熱中することかナ。また研究と申すにははばかるが俳句に没頭といった程度です。

○好物の食べ物の筆頭は、秋田県在職十五年の間、口に適したリンゴを第一に、次は甘藷といったところ。

○電話は〇三－三八六－〇五七四

○東京都中野区中央二丁目二八の三　宝仙学園高等学校内

（小松　記）

▼鉢村　要先生（化学）

創立百周年記念式典の際、永年勤続職員として表彰された先生は昭和十三年五月から四十五年三月まで三十二年間という秋中、秋高職員として（佐藤六蔵先生は別格）最長レコードホルダーであられる。現秋高職員で秋中、秋高出身の殆んどの人々が先生の教え子であるわけだ。

アンケート風に先生よりお便りを頂いた。

○明治四十三年生れです。秋中、秋高在職三十二年、退職後郷里の栃木県に帰り会社に勤めましたが高血圧に悩まされて一年位で退職、現在は気ままな生活です。

○農家の生れのせいか、土の感触、土の香りに言い知れぬ喜びを持ち、五十坪くらいの菜園を四季を通じ耕しては野菜作りに精を出しております。おかげで今は血圧も正常に戻り、この頃は一日でも汗をかかないと気持が悪いほどです。

○秋田は私の半生を過ごした心のふるさとであり、何かにつけ秋高、秋田の山々など懐しく思い出しております。

○私は長い兵役（あしかけ八年）で、それも最後は中部シベリヤでの捕虜生活、復員したのが昭和二十一年九月、実家で約二カ月静養してから秋高に復職、その当時は駅前校舎で、中学校は新制高校にかわり、最初の二、三年は慣れるのに夢中な毎日でした。

○住むに家なく、部屋なく、日曜日は早朝からあちこち部屋探しに歩き廻ったものでした。今ではなつかしい思い出です。

○夏休みの頃でしたか、村岡校長に呼び出され、突然生活指導面を私にとのこと、当時の私にはとてもその任でないことを申し上げ断ったのですが、やってくれとのことで引き受けてしまいました。その頃は戦後の風潮が伝統ある質実剛健さも少しうすれ、またいろいろの出来事が起ったりして、生活指導部も忙しい時期でした。

○趣味は庭木いじり、幸い屋敷も比較的広く、山林を切り開いたところで、雑木を植えては手入れをするのが楽しみ。こちらに引越してきて七年余、庭木もかなり成長して心良い木蔭をつくるくらいになりました。

○食べものは農家に育ったせいか何でも食べます。夕飯の一本の晩酌が楽しみのこの頃です。

○栃木県塩谷郡高根沢町宝積寺一三〇四－五

電話・〇二八六七－(五)－六四二二

（小松　記）

▼鎌田喜市郎先生（昭10～15）

鎌田先生は秋田市泉金の町81の9に住んでおられる。

静かなお座敷であたたかいコタツに入って先生と向かい合っていると、なんだか四十年前の中学生になったような気がする。

あのころ、私たちは、「オラホの先生は国定教科書に文章を書いているんだ」と自慢したものであった。

——先生、どんな文章でしたか。

「ああ、『笛の名人』のことか、あれは十訓抄の中の話を書いたもので、本当はヒチリキなんだが、それを吹いたら海賊が心を改めるという話だよ。」

——何年生の本ですか。

お茶を入れながら奥様が教えてくださる。

「たしか小学校四年でした。」

昭和九年ころの教科書だそうである。

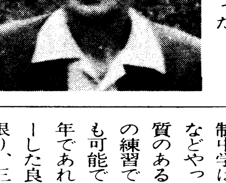
——先生はおいくつになられましたか。

「年のことなんか聞かネッテモいい。こういう歌コ知ってるか。

五十、六十花ならつぼみ
七十、八十花ざかり
九十になって迎えが来たら
百まで待てと追い返せ

ハハハ、おもしれべ。なァ。」

朗らかに笑う先生のうしろに大きな屏風がある。先生が三年かかって巡拝された歴代の天皇の御陵でいただいてきた御陵印をびっしりと貼った屏風であった。



先生は昭和四十七年、東京の明玄書房から『御陵をたずねて』を出された。まさに現代の蒲生君平である。最近再版の話があるとのこと。めでたき限りである。

先生には昭和四十年に『遺言』という著書がある。明快でユニークな評論である。また、雑誌「ミネルバ」を出されて、社会時評を続けられた。該博な古典の知識を内に秘めた新鮮なエッセイである。残念なことに「ミネルバ」は一〇号まで出して今年で終刊になさった。惜しんでいる人が多い。

昨年出版された『終戦前夜』は長く胸中にあたためておられた重厚で哀切極まりない作品である。

——先生、これからはどんなお仕事をなさいますか。

「いや、もう何もできないかもしれないが、一つ、かくあらまほしと思ってることがあるな。」

——テーマはなんでしょうか。

「ナニ、源氏物語と音楽さ。源氏物語読んでもナンモ音聞こえネものナ。源氏の音楽を調べて、それを現代に生かし、今の管弦楽に匹敵するものにしたい。まあ現代の雅楽だね。夢みたいな話さ。」

源氏を音楽として表現する大事業である。自らピアノを弾き作曲もなさる先生の内には文学が流麗壮大な音楽として奏でられているのであろう。

（一関　記）

天上天下

▼編集会議で、スポーツ関係担当の委員が、今年はあまりパッとせず残念であると淋しい顔をされていた。学業とスポーツの両立を理想として、日夜先生も生徒も頑張っているが、その実現はなかなか難しいものがあるようだ。▼進学校は進学校なりの練習方法があると言っても、自ら限度がある。旧制中学は五年間である。スポーツなどやったことのない生徒でも素質のある生徒を見出せば、五年間の練習で立派な選手に育てることも可能であったが、今のように三年であれば、中学で基本をマスターした良い選手が入学してこない限り、三年間ではその育成も至難の問題である。▼大正末期から昭和初年頃の早稲田、慶応などは何のスポーツでも強かったが、今は早慶の時代は過ぎた。高校時代の名選手がいかに入学を希望しても成績が悪ければダメだ。反対にこれらの選手の入学について若干の考慮をしてくれる学校は強くなるのである。素質のある良い選手が入ることは、その学校のスポーツの盛衰に大きな条件になるようだ。▼勝負の世界は勝たなければ意味がないことは判るが、高校は学問とスポーツの両立に向って、ひたむきに努力するその姿こそ尊いものである。秋高健児が青春の三年間をこの二つに努力を重ね、その結果もし敗れても悔いのないものであろう。なぜなら「成せばなる」の信念に燃え、苦しみを越えて自分に打ち勝った体験は優勝にもまさる価値があり、将来の永い人生に必ず役に立つ強い意志と体力をかち取った一つの試煉であったからである。▼今年のスポーツシーズンも終り、期待されたラグビーの決勝戦でノーサイド寸前宿敵秋工に一矢を報いられたのはかえすがえすも残念でならない。▼来年は柔・剣道、野球、サッカーが大いに期待されているようだが、是非とも優勝してOB連中をよろこばせてもらいたいものである。

（小西　記）

県立秋田高等学校52年度同窓会総会

昭和52年8月27日
於　あきたくらぶ

由利・本荘支部総会

○とき　十一月十三日
○ところ　本荘市・徳水ビル二階

斎藤銑四郎（S32卒）の開会のことばで開会された。

同氏の司会で進行され、最初に堀稔（S10卒）支部会長のあいさつがあった。『当支部の会も、早いもので今年で四回目を迎えました。本日は、悪天候にもかかわらず、三十名もの出席をいただきありがたく感じている次第です。

また、忙しいなか、同窓会から小西さん、学校から一関先生、事務局から植村さんのお三方の出席をいただきありがとうございました。オイルショック以来景気も回復せず、また円高などの問題もあり、世想はなかなか大変でありますが今日は、そんなことを一斉忘れてゆっくりした気分で語り合っていただきたいと思います。酒もたくさんありますので。それから佐藤六蔵先生の謝恩金の締切りも近づいておりますので、まだの方はよろしくおねがいします。

本日はどうもありがとうございました。』

総会といっても審議事項もありませんので、次に来賓のことばに移り、小西さんから、会長、副会長の代理で出席したことが告げられ、同窓会の現況が話され、各支部の活動模様も話された。

それに同窓会だよりの模様等も話があった。

それから一関先生のあいさつとなり、進学状況やスポーツ面での今一歩のことなど学校の近況が話され、それぞれに真剣に頑張っていることが告げられ、本荘中学に戦時中奉職したことなどを話し本荘はなつかしい所であり親しみがあることも付け加えられた。

今後ともタテ、ヨコのつながりを深め連帯感をもってゆきたいと話した。

次に伊藤俊雄氏（S18卒）の音頭で、当支部と母校の発展、そして出席会員の健康を祈ってカンパイをする。次に幹事から、支部名簿の完全を期したいので住所等を届けるようにとの願い等があり、懇親会に移り、各自の自己紹介があって、一同で「校歌」を五番まで歌い、いよいよ和気あいあいのうち、午后六時半散会。

出席者次の通り、

▽来賓　小西達四郎、一関吉美、植村久美。

▽会員　堀稔、伊藤俊雄、千田隆、牧与志雄、斎藤昭一郎、堀江剛弘、小坂一男、今野善治、鈴木順一郎、若林和夫、大友常康、岩井健一、東海林博、巌倉正彦、三嶋栄一、今野鍠司、斎藤銑四郎、佐々木金吾、藤丸隆樹、遠藤昭彦、小番忠弘、中泉俊堯、堀江照男、小番茂、佐藤章、池田寛治、佐藤進、斎藤隆、相原定幸、石川。菅野秀雄、菊地杜夫、畠山正高、山本九郎、村山多七郎、安倍興、嶋田洋治、加藤圭之助、小林定静、安藤五百枝、佐藤照、今田猛、植村久美。

以上

（佐藤照　記）

古村精一郎元会長五回忌追悼会

元本校同窓会長古村精一郎先生が亡くなられたのは昭和四八年七月三日です。

生前の先生を囲んでの月例寄合の一つに不同会があり、先生亡き後は毎年祥月命日に追悼会を催しております。

今年昭和五二年も七月三日、大悲寺で、古村先生五回忌の追悼会を行ないました。

今回は幹事長の松本源太良氏（T11卒）が病気入院中の為欠席、代って小西達四郎氏（T12卒）が準備、進行等取り仕切られました。

古村先生を偲ぶスピーチも、故人に声あって各人をして語らしむる如くで懐かしく、梅雨晴れに紫陽花が綺麗な、寂しい乍らほのぼのとした集まりでした。

参会者名（順不同、敬称略）

古村潤二郎、後藤孝一、蓼沼銀治郎、奈良晋蔵、佐々木由治郎、花岡泰雲、小国敬二郎、道田重雄、高橋弥太郎、菊地俊一、大野博通、内藤庸男、小西達四郎、那波伊四郎、金子恭一、三浦敬一、井上勇、赤沼福夫、宮崎政一、渡辺隆一、石井秀雄、大島民治、貝沼研造、

能代・山本支部総会

○とき　十月二十二日
○ところ　能代市・宮茂登

年に一回の支部総会が開かれ、まず、斎藤一雄幹事長（S3卒）が開会のあいさつをしたあと、松野朝造支部長（明治45年卒）が「忙しいところ、わざわざ出席いただきありがとう」とあいさつをし、次に議事に入り、1会務報告。2役員改選（留任）。3その他（特になし）と進行し、次に来賓のあいさつに移り、大嶋副会長が小玉会長の代理出席したことを告げ、同窓会だよりや、佐藤六蔵先生謝恩金募集のことについて話した。

また、校長代理で出席した成田朝春先生は、学業、スポーツクラブなどを中心に学校の近況についてあいさつをし、次に懇親会に移り、柳谷清三郎氏（T8卒）の音頭で乾杯。秋田名物「キリタンポ料理」に舌づつみを打ち乍ら一年ぶりに懇談する。当支部のユニークな催しである飪めし会(秋中会)も今年は家族連れでバスで日帰り旅行を行ったなど、百回を越す会にますます伝統が加わるようだ…。興が盛り上ったところで校歌を斉唱し、能代・山本支部発展のためのフレーフレーをし、盛会裡のうち午後七時すぎ散会した。

出席者次のとおり。

▽来賓者　大嶋民治、小西達四郎、成田朝春、大久保正樹。

▽会員　松野朝造、柳谷清三郎、小泉五郎、西村節朗、宮腰斌一、平川民治、斎藤一雄、森沢正勝、高橋佐七郎、小松皓、小林昌樹、茂木昴、福田英夫、藤谷卓治、松岡和実、工藤英夫、塩谷惇、田中勝三、宮腰孝昭、三浦暢夫、今井敦雄、牧野三千雄、石塚一。

東北肥料羽城会総会

○とき　五十二・六・三
○ところ　如斯亭

東北肥料と関連会社の社員の総会が、つつじも満開の如斯亭で開催された。現在の会員数は六十名であるが、当日の出席者は四十七名であった。同窓会から蓼沼会長母校から小田島校長、枡田事務主任を招いた。

辻幹事長（S三十二卒）の開会のことばのあと、会長の高橋政泰氏（S十一卒）の挨拶、新幹事長に金紀男氏（S三十三卒）を選出し、続いて事務報告などの議事があり、顧問の京野大三氏（S十二卒）の乾杯の音頭で懇親会が始まった。

蓼沼同窓会長、小田島校長から同窓会活動、学校全般についての報告を兼ねた挨拶があり、なごやかな雰囲気で会が進行した。盃がすすむにつれ、いたる所で車座になり歓談する姿が見られた。

最後に「天上はるかに…」と校歌を声高らかに歌いあげ、来年の会を約して、午後八時すぎ散会した。

おねがい

○「つどい」の写真はカラーだと少しボケますので、できれば白黒にして、小さくてもスッキリ顔がわかるようにお願いいたします。

（係）

白根胃腸クリニック
白根東久二（S35卒）
秋田市大町一丁目六－一二
TEL(63)2711

秋田オフセット印刷㈱
専務　柳原良秋（S37卒）
秋田市泉上の町五三－三
TEL(63)0499

大民施設工業㈱
常務取締役　大島駿一（S37卒）
秋田市保戸野原の町二－三四
TEL(23)2659

竹お本店
取締役企画室長　竹谷　繁（S43卒）
秋田市大町２丁目1－4
TEL（24）4566

文具・事務器は
㈱文京堂
三戸俊信（S42卒）
秋田市泉字金の町19－1
TEL（63）1843

パチンコ
ダイヤセンター
新秋観光㈲
社長　佐藤雅彦（S41卒）
秋田市柳原新田
字萱場向60－1
TEL（63）8028

株式会社伊藤技建
株式会社K・D設計事務所
代表取締役　伊藤竹美（S29卒）
秋田市旭南一丁目二－一
☎(62)1414(代)・(63)0651(直)

建築構造コンサルタント
所長　山脇　健（S32卒）
秋田市中通三丁目三番一六号
TEL〇一八八(34)4368

㊕佐藤海産株式会社
専務取締役　佐藤嘉一（S37卒）
秋田市外旭川字梶の目七六－六
TEL(24)4870

㈱大森施設工業所
専務取締役　大森啓雄（S40卒）
秋田市大町一丁目五番四号
TEL(23)0505

ロイヤル鎌田
11/26
中通にオープン《杉のや》
鎌田グループ
専務取締役　鎌田　寿（S42卒）
取締役経理部長　藤谷正夫（S34卒）
ミスタードーナツ店長　田村和一郎（S39卒）

レディスファッション
ベルワールド　マツヤ
チャイルドファッション
チャイルド　まつや
新開　仁（S42卒）
新開　明（S35卒）
秋田市山王５丁目2の5
TEL（23）6326自宅
　　（35）8219会社

ヤング
理容室
美容室
高橋郁夫（S29卒）
秋田市大町１－２－45
TEL（62）6972

昭和五十二年度東京支部総会

○とき　六月二十七日(月)
○ところ　東京・池袋東武百貨店

昨年に増して八十名近い申込みがありましたが、六月末は時期的によくなかったのか出席は六十一名でした。秋田から忙しいところ小田島校長が、大槻事務局長、植村職員と共に出席して下され、蓼沼会長も、お年の割に元気で、遠いところをご出席下さいました。花田支部長、前日迄、必ず出席すると意気込んでおられましたが、病には勝てず欠席され、心から残念がっていました。年配の会員は毎年の顔なじみの方達でして久闊を述べてお互いに元気なことを喜びあっていましたが、若い昭和26年、28年卒の人達はお互いの結びつきもよく誘い合ってたくさん出て下さったことは同窓会支部の前途が明るくなったような感がしました。

(イ)　土井幹事が、同級の花田支部長に代り挨拶して花田支部長が支部長就任以来この会への集りを多くしたいと念願しておりましたが、本年は昨年より多く出席して下さるのをよろこんでいましたが、病気のため出席出来ず、蓼沼会長に合って話が出来ないことが残念だと伝言ありました。

(ロ)　**議案審議**　金谷幹事長から51年度の行事と決算、52年度の予算と行事方針を説明、加賀谷会計監査から監査報告がされ、すべて原案どおり拍手をもって承認された。

(ハ)　役員改選　本年度は、支部役員の改選期でありますので提案され土井幹事が、花田支部長が健康が秀れないので強い辞任の申出であり、幹事会でも留任要望したがきき入れられない旨説明あり、再選をあきらめ、後任支部長の選任規準として、知名度の高い人、会合に出席出来る人、会に愛情をもって尽くしてくれる人を目標に銓衡しましたが三条件揃った適任者が見当らず、最終に支部活動に愛情ある人ということで金谷幹事長が支部長代行で一年送り、その間に支部長を選任することにしたいと申出たが否決され一期だけ支部長に就任と決定しました。他の役員は支部長に一任と決定、後日お願いすることにしました。

(ニ)　花田支部長に記念品贈呈

花田支部長は任期中よく支部活動に積極的に指示され、財政的にも援助され、ご功績がありましたので記念品（ラジオ付デジタル時計）を贈ることに承認を受けた。

(ホ)　**前支部長で最長老の富永さんに音頭をとってもらいました。**

(ヘ)　蓼沼会長挨拶

東京支部より毎年招待を受けてよろこんでいる。百年祭より四年を経過したが、その時の支部のご協力に感謝している。東京は新支部長中心にいよいよ発展してもらいたい。

(ト)　小田島校長挨拶

二度目の出席だが盛会でよろこばしい。学校の近況は会報等にも載せてありますが、生徒は、自主自立の精神で年々向上し、進学の成績は立派にあげている。体育面では、柔道とボートが優勝し、ボートは東北大会でも優勝したから全国大会でも期待している。剣道、弓道は準優勝したが、すべてに秋高は、秋田県の代表にならなければならないという気概をもってやらしている。野球は夏の大会を期待している。

(チ)　大槻事務局長（昭13卒）挨拶

昨年に増す盛大な会合に招かれて嬉しい。同窓会は母校の整備に協力しているが大変よくなっている。

以上のご挨拶を頂き乍ら八卓を夫々知友を求めて会合し、昔話から現況について二時間近く語り合い昨年にもまして楽しい雰囲気が生まれていました。佐宗先輩の音頭で校歌を歌った時は、最高に盛り上り、九年の八代さんが寮歌の音頭を取ったりして、若い年代の同窓が可成り陽気にはしゃいで盛会でした。その後級友誘い合って二次会に出かけるらしかった。

昭和41年卒同期会

○とき　10月1日
○ところ　川反南蛮楼

松山忠、桜谷吾朗、北条昭夫、奥山良俊、諸先生方の御出席を得会員38名の出席をもって、午後六時半より、松山先生の乾杯に、会は始まった。ちょうど我々も30才に成り、働き盛りのせいか、出張や仕事の関係で、欠席の返事が多かったのは、幹事として残念でありました。今回で五回目なのですが途中で名簿が紛失し、徐々に会員の動行をつかんでいる最中です。幸い今回出欠合計90名の正式な、住所を入手し次回の幹事に、受次いでやりますので次回はもっと、会員が集まると思います。

さて乾杯の後でありますが30才から、心はすぐ高校時代に返り、大いに飲み食い、歌い、次第に将来の話などもでて会を盛会にす。最後に全員起立、応援団長の振元校歌五番まで合唱。又来年の再会を約し散会した。尚今回案内の届かなかった人や、新たに消息のわかった人は、次期幹事、

佐藤俊彦（三五）六七一九　又は
川村　忠（三二）四八三八　へ、

連絡の事。

（平岡清明　記）

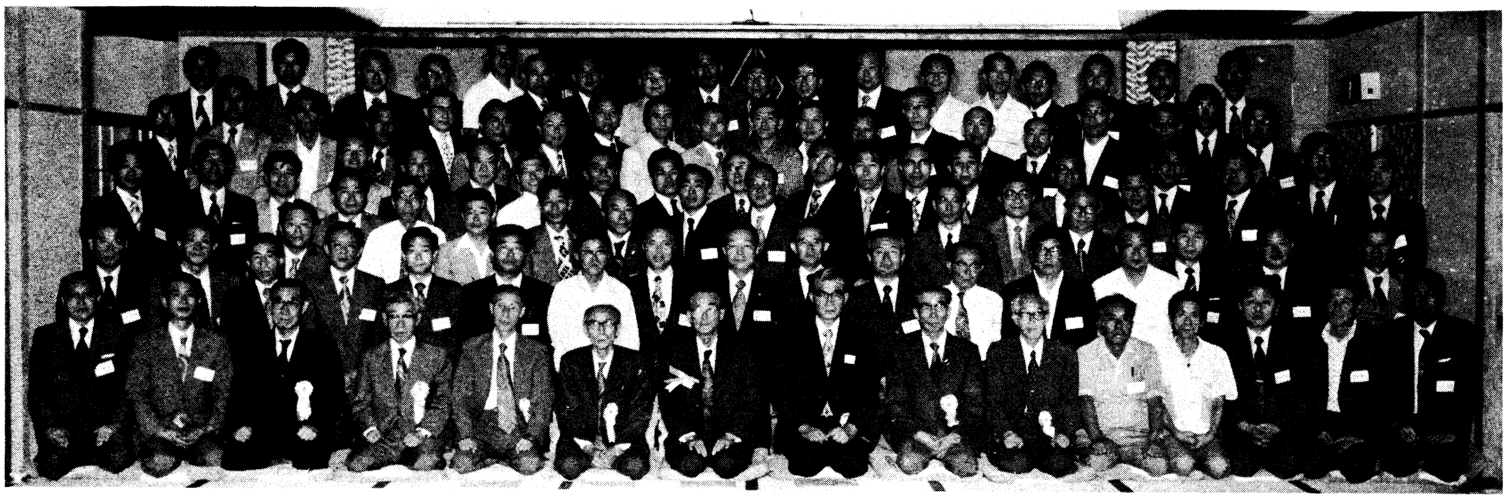
昭和二十一年修了・昭和二十二年卒業三十周年記念同期会

○とき　52・8・20～21
○ところ　南秋・八郎潟ハイツ

昭和十七年四月六日手形の県立秋田中学校に入学した紅顔多感の少年たちも卒業以来はや三十年を過ぎ、社会の中堅として活躍している。

思えば田植え、稲刈り、開墾作業、水害復旧作業（勤労奉仕作業と称した）、新屋浜での軍事教練、鍛練行軍、食糧増産作業、そして土崎工機部の動員と明け暮れ、まともな勉強は一年生のときだけであった。太平洋戦争の敗戦によって手形の校舎は進駐軍に接収され、将軍野の帝石青年学校に机を運んだ。その後市内の小学校に分散し、小学生との二部授業制をとり、最後は旧十七聯隊跡が校舎となった。その秋中時代を偲び、旧交を温ため、親睦を深めようという有志の呼びかけにこたえた同期生は九十四名であった。それに昔日ご教導くださった恩師七先生と母校小田島校長をお迎えして同期会の総会が行われた。

渡部光太郎君の司会進行により、まず不幸にしてお亡くなりになった十五名の方々のご冥福を祈り、続いて小泉憲雄君が世話人を代表して経過報告と盛大な開会についての謝意を含めた挨拶をのべた。恩師諸先生のご紹介、恩師代表町田与太郎先生のご挨拶と、小田島校長から母校の近況報告をいただいた。卒業以来三十年も会ったことのない方も可成りおられるので大友次男君が出席者全員の紹介を行った。最後に都合悪くご出席できなかった沖田先生、奥山先生からのお手紙を朗読し、さらに同期生から寄せられたメッセージ、手紙、祝電等を披露した。この中で文部省留学生でロンドンに在住の小松元也君から『昔にかえってホジなくさわぎたい気持で一杯』と不参加無念を訴える航空便と、東京十四日会を代表して小林宏之君からのユーモア溢れる丁重且つ長文のメッセージ、『若い根っこの会』で大活躍の加藤日出男君の手紙を紹介し第一部総会の幕を閉じた。



次いで会場を大広間に移し、一同記念撮影ののち懇親の宴に入った。**渡辺純夫、佐藤直一郎両君により進められ、東海林恒雄君（東京）の乾杯で始まった。**指名によってラグビーグループ、予科練グループ、応援団グループなど小グループでの副歌、凱歌、応援歌等の披露があり、飲むもの、語り合うもの、懐しさのあまり涙するものあり時の流れを忘れさせるほど盛会であった。午後八時半七名の諸先生を玄関でお見送りした。再び大広間に戻ろうとする九十四名の誰からとなしに校歌の大合唱がロビー、階段、廊下、大広間へと進み多感の少年時代そのものがハイツ一杯に再現された。

そのあとお泊まりの高山先生を中心に車座が出来上り当時の思い出話や「ABC」の歌を唱いながら楽しいひと時を過した。

（高橋昌一　記）

出席者は次の通り。

▽恩師　町田与太郎、鈴木勝三郎
高山重雄、田村甲毅、清水通良、
大村簡二、小笠原一郎、諸先生
▽学校側　小田島邦夫校長
▽出席者
阿部幹弘、安藤重雄、越中良平、
大島　清、大友次男、大渕為政、
鎌田孝一、鎌田清悦、川口祥治、
小泉憲雄、児玉邦男、小玉長毅、
佐々木忠丸、笹木陽一、佐藤和男、
佐々木定行、佐藤直彦、佐藤令自、
進藤耕太郎、進藤専一、杉田　宏、
高桑章太郎、高橋昌一、高橋利雄、
高山　強、武田啓二、藤原良治、
保坂彰男、馬渕清人、三浦繁雄、
宮田強哉、最上操一、柳田英治、
山口　浩、和田　明、喜多川武、
阿部定三郎、石川　萠、石田　巌、
伊藤鋼二郎、石田達也、井筒　顕、
大島三代助、伊藤良男、上村幸俊、
岡崎金二郎、大里正夫、小野　悟、
加賀谷弘、加沢敏郎、加藤健三、
加々谷亘、加藤悟郎、金子忠蔵、
鎌田与志美、川尻　宏、黒沢英一、
黒沢俊夫、小島鎮夫、小西忠邦、
小林俊夫、作佐部茂、佐々木義次、
佐藤篤雄、佐藤菊夫、佐々木芳美、
佐藤恒悦、佐藤鉄男、佐藤直一郎、
佐藤良七、菅原脩二、東海林一郎、
高橋徳雄、竹内龍一、東海林恒雄、
武田精一、千田宗平、辻国四郎、
土田和典、戸島　弘、堀江貞治郎、
富地五郎、中川俊三、堀田井義孝、
吹谷　茂、細田　全、渡辺幸四郎、
堀井　孝、舛谷寿男、渡部光太郎、
松田昭雄、宮原和雄、渡辺純夫、
渡辺　隆。

桜田商店
桜田英夫（S37卒）
秋田市手形西谷地一〇九ー一
TEL(33)2328

(株)マルナカ
社長　藤林弘一（S37卒）
秋田市中通三丁目二ー二七
TEL(34)1541

株式会社オー全鉄
取締役社長　信太勝（S16卒）
秋田市大町五丁目一ー一七
TEL(23)4141

高級紳士服と婦人服専門店
中山
中山文夫（S28卒）
秋田市大町5丁目3—35
TEL(62)6268

政府登録国際観光旅館
榮太楼
代表取締役社長　小国敬二郎（S9卒）
秋田市千秋矢留町六ー一五
TEL(33)4151~5

菅原眼科医院
菅原脩二（S22卒）
能代市柳町四ー三
TEL〇一八五五(2)5101

有限会社岡崎旅館
岡崎金二郎（S21卒）
秋田市中通三丁目一ー二六
TEL(32)4822

越中谷写真商会
越中谷正美（S29卒）
秋田市土崎港中央六ー五ー七
TEL(45)6201

株式会社畠山製粉所
畠山春男（S29卒）
秋田市旭南二丁目2番46号
TEL(23)8055

ゼネラルタクシー(株)
代表取締役　土井顕一（S29卒）
秋田市泉登木二ー二
TEL(63)1605

(株)アキタアートデザイン
三浦礼三（S14卒）
土田昌孝（S40卒）
佐藤和夫（S40卒）
森川恒（S43卒）

株式会社小泉薬局
社長　小泉憲雄（S21卒）
秋田市南通亀の町一四ー二〇
TEL(32)2939

株式会社北日本自動車学校
三案自動車
代表取締役　佐藤邦夫（S36卒）
秋田市手形田中一四ー一一
TEL(33)8125

加賀谷殷法律事務所
加賀谷殷（S35卒）
秋田市将軍野南二丁目五ー一九
TEL(46)7229

卒業四十周年記念同期会

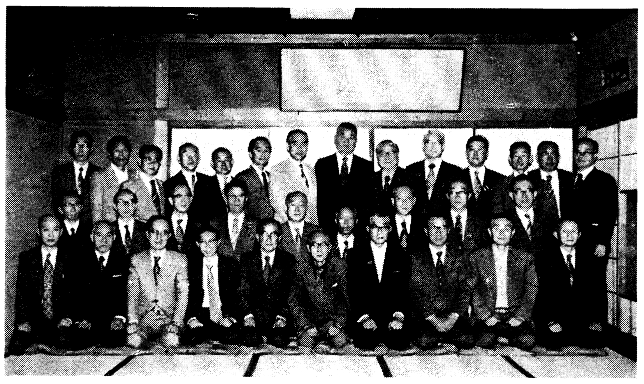
（昭和十二年卒）

第五十期組の記念同期会が、去る五月二十一日五時より、割烹あきたくらぶにて開催された。私どもの年度は、秋田と東京で、それぞれの同期会が毎年賑やかに開かれ、その都度情報交換をしているが、この度は記念の同期会なので全国の学友に案内を出した。

当日は、千葉からはるばるこのためにお越しになられた三川先生ご夫妻をはじめ、山下四郎、高山重雄両先生と秋高の小田島校長のご臨席をいただいた。在京組からは横田英夫、加藤孝三両君の参加もあった。とくに横田君は、根小屋町の頃の秋中三年終了で転校して以来の、四十二年ぶりの秋田入りで、迎えるわれわれも大いに感激し久闊をあたためた。

小田島校長の附属小学校時代の同級生に、当日出席した那波、小沢、工藤などがおり、秋田から転居されなければ、秋中でわれわれと同期の仲間となるはづであったことなどのご挨拶があり盛大な拍手があった。

三川先生の少しもお変りのないあの張りのあるお声での熱烈なご挨拶や、山下先生の風格あるお話、高山先生の洒脱なスピーチなど学生時代にかえった気分で、拝聴出来たことは有難いことであり、忘れ得ぬこととなった。先生には記念に桜樺細工の小タンスを贈り腕白時代のお詫びを少々したつもりである。宴は、那波、小玉両君寄贈（毎度のこと大いに感謝）の秋田の美酒銀鱗、太平山を汲み交わし、事業のこと、孫や嫁の話など、席を変え、盃を交わし、青春時代にもどったような賑やかさであった。応援歌、校歌に蛮声をはりあげてのあとの、万才解散は例年通りで、二次会三次会も年を忘れての夜廻りぶりも、これ又例年通りといった一夜であった。恩師を囲み友相集う、まことによきかなである。当日藤崎君から自作の詩が披露された。



寄秋中同期会　藤崎生（吉次）作

瞑々四十歳華流　学友相来催宴遊
此夜空晴春水浄　是時風暖樹庭幽
昔年少壮青雲志　今日倦魂斜照愁
勿歎衰残霜鬢恨　忘齢談旧暫悠々

（出席者）

小田島邦夫先生（現校長）、三川時郎先生同令夫人、山下四郎先生、高山重雄先生、横田英夫（東京）加藤孝三（同）阿部新、相沢弘、伊藤博次、石垣義雄、荻津章、小沢雄象、小貫顕、菊地五男、細川悟郎、草薙義照、工藤俊三、京野大三、小玉健吉、小縄太郎、近藤達郎、佐藤友三郎、桜谷吾朗、佐々木茂夫、高橋康三、那波三郎右衛門、鳴海健治、根本常夫、福田兼一郎、藤崎吉次、山下久、山崎忠秀、渡辺忠雄。

近畿支部総会

○とき　11月11日
○ところ　大阪・くいだおれ

近畿支部総会も今年で三回目を迎えた。午後六時すぎ、栗谷広氏（S11卒）の開会のことばに続き、伊東糾氏（S15卒）の司会で会が進行され、神田孝一支部長（T13卒）が挨拶『本日は、秋田から小玉会長外四名の方々が、遠路おい出下さり、感謝を申し上げます。また今日は、お忙しい中たくさん出席いただきありがとうございました。この会で、第一に感じましたことは、歴史と伝統の旗のもと、何をさて置いても集まって来れるんだなぁ～と思い、本日は初めから無礼こうで秋田の香りのする話をし、若い頃にかえって、一夕の歓を尽したいので、どうぞごゆっくりしていただきたい」。

続いて北条晃氏（S28卒）より庶務会計報告があり、今年の高校野球代表の能代高校にエール応援として支部より一万円後援したことが報告され拍手で了承された。

次に後藤政雄幹事長（S8卒）から、出席の来賓が紹介された。

次に来賓挨拶に移り、まず小玉会長が「初めて支部総会に出席しました。実は、この九月より前会長のあとを引き継ぎ会長に就任しましたが、何のとりえもないものでありますがよろしくおねがいします。今日は、近畿支部にお招きいただき、大勢で出席いたし恐縮です。私も大阪には、想い出がありなつかしく感じます。しかし同期生も少しずつ少なくなり寂しさを感じます。野球等の遠征等では何回となく物心両面にご支援いただき厚くお礼申し上げます。秋田と大阪でありますので、何のお返しもできませんが、みなさんの今後のご健康を祈って挨拶とします」。

また、大槻事務局長が、学校環境・進学状況・スポーツ面の三つに分けて、それぞれ学校の近況を報告した。また県大阪事務所長小山氏の挨拶、大嶋副会長の「佐藤六蔵先生の謝金についてのお願い」等について話があったあと、出席者全員で記念撮影したあと懇親会に移り、野内忠雄氏（T9卒）の音頭で乾杯。大阪の道頓堀の夜の想い出話等で有意義に過ごす。また出席者全員の自己紹介もあり、それぞれ、自分の近況を一分以内で紹介し、拍手かっさいだった。

午後九時ころ校歌、校友会歌を声高らかに歌い、最後に石黒次郎氏（S6卒）の音頭で万才三唱をし、来年の総会を約し散会する。

出席者

▽来賓　小玉孝次郎、大嶋民治、松本源太良、大槻家静、植村久美、小山高文

▽会員　野内忠雄、宮越精三郎、神田孝一、石田伸雄、江畑春雄、宮越竜一、石黒次郎、佐藤文美、渡部正、後藤政雄、境田典雄、佐藤四郎、栗谷広、伊東糾、渡辺謙二、渡辺良宏、田口長兵衛、伊藤洋一、桜庭功三、槇本彰、旭谷守、今村剛、進藤正、二木文男、北条晃、嶋田嘉勝、佐藤晴朗、旭谷清治、石山元一、宇佐美一雄、新田聡、宮圧哲夫、藤井正秋、西海枝征夫、小玉幸男、加藤俊勝、中田史郎、加藤勝美、庄司麟次郎、八柳汪、宮腰精三郎夫人、伊東たけ（校友）、松本源太良夫人。

昭和26年卒同期会

（関東地区会）

○とき　10月29日(土)
○ところ　東京・銀座ふく武

第六回を数えた今回の総会にはテヘラン・大阪・青森・秋田等からの出席者を含め34名が出席し盛大に開催され、この模様がNHK報道番組部から取材収録され、去る11月23日（勤労感謝の日）に左記のとおり放映された。

秋田高校26年卒同期会関東地区会

記

◎テレビ放映日時等

(1) 日時　11月23日(水)PM10：45～11時のうち一部

(2) 番組タイトル「勤労感謝の日特集」

(3) 取材目的と内容

㋐ 戦後の混乱期から高度成長時代を経て減速低成長時代を迎え、又、一方雇用不安等、社会的にも見通しの暗い〝これからの日本を如何に生きるべきか〟が番組全体の流れ。

㋑ 以上の戦後の貴重な歴史を身をもって体験してきた年代の一つのグループとして、たまたま選ばれたもの。

㋒ 取材内容としては、同期会での自己紹介、インタビュー・校歌、応援歌での気勢の場面等です。なお、テレビでは東北の名門校「秋田高校」卒業生として紹介されました。

農協五連支部同窓会

○とき　九月十日
○ところ　アキタ・ニューグランドホテル

農業会館会員の待望久しかった同窓会支部設立総会が、残暑きびしい九月十日開催された。

役員をつぎのように選出し、会員相互の友誼と、同窓会の発展を誓い合い、校歌、校友会歌を合唱し盛会であった。

役員はつぎのとおり。

支部長　村越茂雄（S14卒）
副支部長　佐藤健哉（S15卒）
小松雄三（S19卒）
稲葉茂（S20卒）
事務局長　嶋崎藤喜雄（S28卒）

会計　小塚淳三（S33卒）
委員　稲葉進（S30卒）高橋健、深浦修、佐々木義朗（以上S33卒）北条紘好（S34卒）
会計監査　森川潤（S28卒）
高山久志（S31卒）

当日の出席者は、二十四名をかぞえ、総会員四十三名のうちの出席で、会員各位の関心の深さを物語っている。

秋高サンパチ会総会

（昭38卒）

○とき　八月十五日(月)
○ところ　アキタパークホテル
出席恩師　菅原繁雄、山谷浩一、加藤仁美、木村修先生

午後六時、右記諸先生をお招きし、本山君（滝不動産）の開会宣言、当会代表伊藤君（中央土建）の挨拶のあとご出席の先生を代表し、加藤先生からご挨拶をいただき、ついで佐々木君（県庁人事課）より、51年度の事業報告、会計報告がなされ、満場一致で承認された。

記念撮影のあと、懇親会に移り、佐藤君（佐藤写真機店）の名司会のもとに、多種多様のかくし芸やとび入り余興など披露され、会も最高潮に達し、特に同期生同志の小納ご夫妻の「銀座の恋の物語」のデュエットが、やんやの喝采を浴びた。佐藤忠君（当時応援団長）の音頭のもとに、お定りの校歌、応援歌、最後に菅原先生の「秋高サンパチ会」万才の三唱、閉会。

秋高創立百周年祭を契機にして「古き良き時代」の回想と同期生の親睦を深める意味で毎年八月十五日一堂に会することにしましたが、十余年間の空白は如何ともしがたく、今回の総会にも四百通の案内状を郵送したものの、百通余り宛先不明で返送されております。次回の総会まで、尚一層完全な名簿づくりをめざして多くの同期生諸君に通知が届く様努力するつもりでございます。

年々、参加者も増えておりますので、横の連絡を密にし「サンパチ会」の団結と親睦、ひいては、秋高及び同窓会のご発展に一翼を担いたい所存であります。

（一関　記）

本郷建設工務所
社長　本郷正敏（T10卒）
専務　本郷真（S23卒）
常務　本郷滋（S28卒）
秋田市千秋矢留町七－二九
TEL0188(32)1737

中山組
社長　中山久（S2卒）
秋田市南通築地一四－一四
TEL(32)5113

第一建設株式会社
取締役社長　安倍興（S5卒）
秋田市濁川字菅場四
TEL(32)6288

森沢工務店
社長　森沢正勝（S7卒）
能代市中和一丁目一一－一三
TEL〇一八五五(2)6366

有限会社斎藤組
社長　斎藤鉉吉（S9卒）
秋田市千秋城下町三－二〇
TEL(23)5517

株式会社菅与組
取締役社長　菅原太郎（S12卒）
取締役専務　菅原三郎（S26卒）
南秋田郡昭和町大久保字町後五三
TEL〇一八八七（4117／2131）

東海林工業株式会社
専務取締役　東海林広司（S17卒）
秋田市川尻町字大川反一七〇－四五
TEL(23)4404

㈱秋田土建株式会社
代表取締役　北林庄作（T15卒）
副社長　北林照助（S20卒）
専務　北林祥伍（S25卒）
秋田市山王五丁目六－二〇
TEL(23)2579

有限会社武田土建
取締役社長　武田頼太（S4卒）
秋田市寺内イサノ一九－二
TEL(62)0309

鹿島建設株式会社
秋田営業所長　大門美代三（S6卒）
秋田市山王三丁目一
TEL(62)4346

株式会社栗原組
取締役専務　渡辺景友（S8卒）
秋田市八橋戌川原四八－一八
TEL(62)3261

日本海建設株式会社
代表取締役　京野大三（S12卒）
取締役　小野崎三男（S15卒）
秋田市新屋砂奴寄一
TEL(62)3806

日北土建株式会社
北日本開発コンサルタント株式会社
取締役社長　酢屋潔（S15卒）
秋田市楢山登町四－五〇
TEL(33)1452

株式会社岡精組
社長　岡部徳（S17卒）
河辺郡河辺町戸島字オソノ二
TEL01888(2)2143

昭六会同級会

今年も冬の季節を迎え、秋田にも雪がじき降りせまる十一月六日の昭六会には、東京から池田静一君を迎え、14名の少人数であったが、近来にない熱気を帯びた会になりました。近況報告も年齢を吹きとばして、時勢に対する意見、鎌田民治郎君の環境施設に対する抱負など、又珍らしい民謡の披露もあって、にぎやかな会合を過ごしました。最近の同級会の状況は次の通りです。

52年11月6日（秋季昭六会）午後三時半〜七時、於アキタニューグランドホテル

▽出席者　池田、阿部(武)、松本、菅原(作)、岡、松渕、浅田、武藤、鎌田(民)、武田、鈴木(一)、近藤(英)、島田、菊地（敬称略）

8月18日に急逝した栗原忠君の追悼、物故者への黙禱の後、連絡のあった諸君の消息を報告、出席者各々の近況を報告しながら懇親会。この席で明53年4月10日を目標に故人となった級友の「追悼会」を催すことにしました。

52年6月1日（秋季昭六会）午後六時〜八時、於アキタニューグランドホテル

東京より谷藤正三君を迎えて国土開発に関する科学に立脚し且つ地方の地域住民の文化、経済発展を期し得る意見、抱負を聞き乍ら初夏の一夜を楽しく過ごしました。

▽出席者　谷藤、浅田、平沢、島田、武田、鈴木(一)、森、大門美代三、佐藤豊吉、諸井、根田、落合、鎌田(民)、阿部(武)、菊地、栗原忠（最後の出席となった）（敬称略）

52年5月30日（在京昭六同級会）午後6時〜8時、於「秋田藩」

▽出席者　大山、谷藤、佐藤良寿、乳井、児玉豊治、安部(克)、小松成伸、池田、早川、秋田より近藤中安（敬称略）

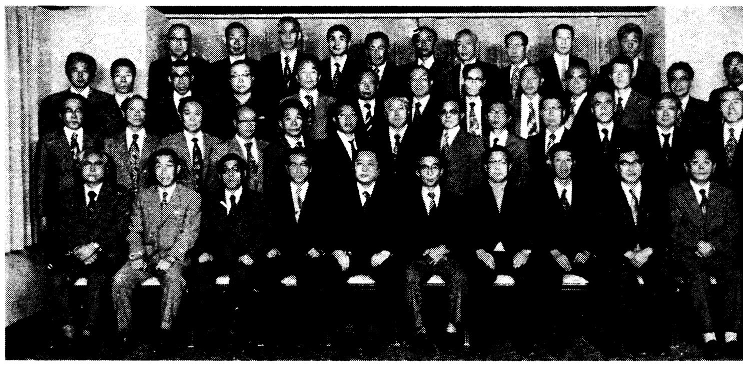
例年三月一日の卒業記念日に開くのが進藤末治君の病気で延期した。52年2月27日(51年秋季の代りに)午後五時〜七時、於アキタニューグランドホテル

▽出席者　近藤、村上(旧出原)、根田、岡、栗原、三沢、武田、鎌田(民)、菅原(作)、松本、中安、松渕、鈴木一、島田、金山、諸井、佐藤(俊)、武藤、森、佐々木(令)、平、阿部(武)、田畑、菊地、敬称略

昭和十八年同期会（一八会）

○とき　八月二十七日(土)

○ところ　アキタパークホテル



会員四十六名出席、恩師鈴木勝三郎先生の御臨席のもとに、午後四時半に開会しました。

初めに会長から今春、栄ある叙勲を受けられた恩師伊達義行、鈴木勝三郎、佐々木三治郎の三先生に対する、会員一同からのお祝いの言葉を申し上げ、記念品を贈呈し、又出口広光会員の県出納長就任を祝福する挨拶が述べられた。なお、協議事項として来年は卒業三十五年という一つの節目にも当るので、記念事業を実行することを申し合せた。

当日は、あいにく母校の同窓会と重なってしまい、御来臨をお願いしておりました学校長、同窓会長の出席を得られなかった。また、伊達、佐々木両先生は健康が勝れないためご出席できなく、誠に残念でした。

鈴木勝三郎先生は、四B、五Dと二年連続してクラス担任をされたもので、当時のクラス写真や先生あての古い手紙などをごひろうされた。一同懐古の感に打たれ、時間の経つのも忘れて歓談しました。

なお、出席できなかった五十七名の方々からは近況を報ずるメッセージが寄せられ、また、今まで消息が明かでなかった方々のうち十五名が、北は北海道から、南は九州まで、それぞれ各界で元気に活躍されておることがわかりました。

当日の出席者は次のとおりです。

伊藤義一郎、伊藤俊雄、石井精一、岩田利夫、梅津忠誠、江川太郎、小川尚、小川義平、小野文雄、小野芳雄、太田規、荻田忠、加賀谷一夫、加賀谷尚、加藤景宏、柿崎光雄、川村剛、後藤孝一、佐藤和夫、佐藤久、斎藤一郎、稲葉善正、白根雄二、新堀孝義、進藤俊一、鈴木喜久雄、薄田啓一郎、田中利男、玉尾勇、土井常吉、中野稔、鍋倉昌道、成田朝春、野口直己、平賀保、広島正雄、古田守、加賀谷厚、三浦忠雄、三浦隆之助、水沢瑞門、村上治雄、最上徳之助、門間健児、渡辺健一、渡辺忠。

昭和二三年同期会（六二期会）

○とき　六月十一日(土)

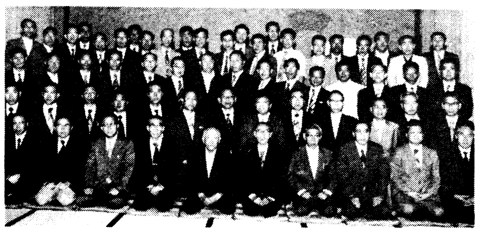
○ところ　あきたくらぶ

昭和二十三年の秋中最後の卒業と二十四年の秋高最初の卒業と両方を経験しているわれわれの同期会は、秋中の方に因んで六十二期会と名づけている。

今回は四十八年以来四年ぶりの全国会で、しかも同窓会から蓼沼会長、秋元理事を、そして恩師鈴木勝三郎、高山重雄、清水通良の各先生をお迎えするとあって、出席も五八名に達する大変な盛会であった。昔懐しい三先生のごあいさつには、それぞれの先生の風格がにじみ出ており、生徒の時には難しい内容で十分理解できなかったものが、今ではよくわかり楽しいのが不思議であった。

明五十三年は秋中卒業三十周年にあたるので秋田県庁在職の会員が当番で必らず開催することを約して名残り惜しくも散会したことであった。

▼出席者　相沢幸四郎、井川一夫、池見元宏、石河卓弥、石黒兵四郎、伊藤鉄也、大山博美、大島降志、扇田秋夫、小野穣、太田平八郎、加藤富貴夫、加藤三夫、加藤常、加納健治、加賀谷満、亀井有一、川口和夫、貝田雅男、菊地徳一郎、国安啓二、小西寿一、今野一美、近藤重昭、斎藤広孝、高橋稔、笹原秀雄、佐藤新吉、佐藤信太郎、佐藤輝男、佐藤英夫、佐野謙二郎、荘司徹、白山初蔵、白川栄治、進藤日出夫、鈴木一男、高橋健彦、高橋一夫、田口誠一、



岡本定夫、中川和夫、内藤委仲、原三男、原田亮吉、日野浩宣、広島吾朗、藤田三智行、藤田幸雄、藤井正文、藤本弘、堀川進、松岡稔、宮沢惟安、湊潤二郎、八重樫亮二、安田庄一、渡辺忠夫

（原田　記）

昭和14年卒同期会

○とき　52・10・1

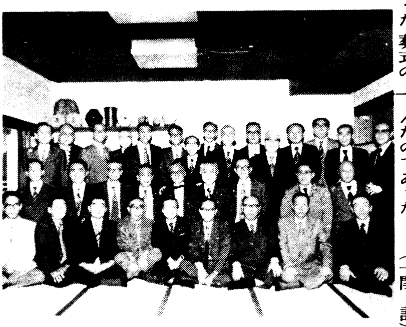
○ところ　アキタニューグランドホテル・グリル

会する者三十有余名。悠揚迫らぬ銭谷君と気軽にキビキビ動く村越君が幹事役。

故佐藤俊雄君の冥福を念じて黙禱を捧げ、藤原君からは、佐藤俊雄君の晩年について簡潔で、しかも行き届いた報告があった。葬式の時には、阿部君の配慮で、同期会の名で花輪を供えてくれたそうである。ありがたい配慮であった。

さて、一同、四十年前にもどり、菊地君がついているから大丈夫と痛飲。語り、笑い、校歌、校友会歌、応援歌を高唱して時の移るにも気づかず、年次としては、まったく久しぶりに、充実した一夕を楽しんだのであった。

（一関　記）



昭和十九年同期会

四十九年八月、卒業三十周年記念を祝し、会を盛大に開催したが本年は三十三年になるということで全国に檄をとばし、五十二年八月十四日午後五時より「平安閣」に於いて開催した。初めに一同打ちそろって記念撮影、つづいて辻兵吉会長の相も変らぬ友情溢れたユーモアいっぱいの挨拶に哄笑、梶原忠郎幹事より学校の現況報告、池田竹二郎幹事から欠席者の近況（ハガキによる返信）案内あって開宴した。もはや雪の如く白くなったヤツ、そろそろアデランスが欲しくなったヤツ、あちこちの席で爆笑につぐ大爆笑。年のせいか酔もはやくなったようだ。辻会長の音頭で校歌斉唱をやり出すと、数知れぬ応援歌が奔流となってはじけ出した。激しい苦しいあの時代を共有する我々には確かに強い連帯感がある。損得を超えた一体感があるとしみじみ感じた……。

▽出席者　五十二名

辻兵吉、伊藤弘、佐藤広次郎、京野義七、永井千三、佐藤俊男、佐藤彰、佐々木平次郎、野口養吉、沓沢新、大友佳敬、佐藤頼雄、富樫隆、組谷幸雄、三浦清、進沼桂、諸橋順三、須藤吉雄、佐藤幹雄、武藤五郎、植田正夫、橋本英鉄、平元義雄、船木正男、鳴海英作、村上十郎、佐藤金弥、山崎謙一、柏木勇夫、榊慶一、笹木正昭、五十嵐芳郎、小林喜代広、川村懋、加藤吉雄、星野隆、加賀谷久雄、星野金一郎、川井義雄、田村義智、佐々木宗逸、倉部金之助、藤井治男、浅利哲朗、佐々木正三、井川健市、池田竹二郎(幹事)、平野秀三郎(幹事)、高橋貞次(幹事)、志田栄一(幹事)、梶原忠郎(幹事)、小松彰(幹事)

（小松　記）

八重樫建設株式会社
取締役社長
八重樫宏一（S20卒）
秋田営業所長
八重樫亮二（S23卒）
秋田市高陽幸町一二一一三
TEL(63)3838

株式会社佐々木組
取締役常務
佐々木憲隆（S30卒）
秋田市南通みその町四－七三
TEL(32)2396

株式会社加藤組
常務取締役
澤田正司（S31卒）
男鹿市脇本字向山一八－六
TEL〇一八五二(5)2235

中央土建株式会社
専務取締役
伊藤久一（S38卒）
秋田市大町一－七－二七
TEL(23)1737

長田建設株式会社
取締役副社長
長田憲一（S42卒）
本荘市古雪町四
TEL〇一八四二(2)2811

秋田三菱自動車販売㈱
大館三菱自動車販売㈱
横手三菱自動車販売㈱
取締役社長
三浦金次郎（S16卒）
秋田市保戸野すわ町3－5
TEL（63）6044

秋田トヨタ自動車㈱
村上十郎（S19卒）
秋田市中通六丁目一三－五
TEL(33)1809

株式会社清三屋
取締役社長
長谷川吉郎（S25卒）
秋田市泉字大橋一九二
TEL(62)5761

有限会社奈良工務店
建協生コン部
取締役社長
奈良力男（S31卒）
秋田市茨島一丁目五－二八
TEL(23)0852

合資会社大和建設
専務
大和正輝（S35卒）
仙北郡六郷町六郷字馬町三〇
TEL〇一八七八(4)0026

株式会社池田工務店
代表取締役
池田寛治（S38卒）
本荘市脊町五〇
☎〇一八四二(2)0464・0477

寒風石材株式会社
常務取締役
菅原広悦（S43卒）
男鹿市脇本富永字野田一〇
TEL〇一八五二(5)2221

秋田市中央卸売市場
㊊秋田県青果株式会社
常務取締役（営業担当）
高橋良治（S31卒）
秋田市南通築地七番八号
TEL(34)5111

秋田マイクロ写真印刷㈱
電子写真印刷・タイプ印刷
オフセット印刷・青写真
マイクロ写真・陽画コピー
辻　悌五郎（S27卒）
秋田市保戸野中町3－38
TEL（23）7161㈹

慶祝

◎県教育功労者
特殊教育
○中村四郎（55歳）昭14卒

◎市町村功労者
△秋田市▽
○大島清蔵（78歳）大5卒
△岩城町▽
○黒丸五郎（81歳）大4卒

―昭和52年文化の日―

母校だより

世は挙げて教育時代である。旧制中学一年～三年に相当する年令の青少年は義務教育の中学生、旧四年、五年に相当する高校生の進学率も九割を超えた。進学問題が連日新聞・雑誌・テレビ、時には国会でも討論される時代である。

本校もこのような時代の流れを避けて通ることは出来ない。三年生になると、定期考査5回、校内実力試験3回の外、土・日曜を利用し各種模試が年20回も行われるようになった。これでも各地の名門校に比較すればのんびりしている方である。しかし54年度からの共通一次試験には、さすがの秋高生もいささか不安のようである。

現在の運動部の各選手は、文字通り、学業と運動を両立しなければならない立場になっている。しかし、ラグビー部は、10月29日、全国高校ラグビー県予選大会で、秋田工業に決勝戦で惜敗したが、新人戦では優勝。また硬式野球部も、秋季全県選抜大会では準決勝まで進んだ。柔道・剣道・ボート・サッカー等の各部も、立派な成績をあげている。来年は更によい成績が期待される。

第4号以降の学校行事としては、6月の全校30学級による合唱コンクール、7月の期末考査終了後の学級対抗、9月の秋高祭、全校太平登山等に生徒は青春のエネルギーを発散している。第2学年は10月中旬、恒例の、関西方面への修学旅行で、古い日本の美を満喫し無事帰校。10月中旬から11月中旬まで約一カ月間は、担任と生徒父母との個人面接が行なわれた。昔とちがって殆んど全員が参加するようになった。12月中旬からは、冬休み、そして3月の卒業式、その間に大学入試、学校の最も忙しい時期がまもなくやってくる。手形山校舎の樹木はまことに美しい。春の桜・秋のいちょうの葉、この恵まれた自然環境から秋高生が巣立って行く。諸先輩のご来校をお願いする。（S20卒　山谷浩二）

飛沫は白く、艇速し

＝ボート部　全国大会へ進出＝

52年度クルー

監督　高田屋　敏夫
舵手　柴田勝久（3年）
整調　斎藤　潔（3年）
三番　小林吉則（3年）
二番　高田博充（2年）
舳手　佐々木潤（3年）
補欠　杉山　透（2年）
補欠　照井通恒（2年）

新艇庫が竣工して三年、当時の一年生が最上級生となり、全国的にも一応のレベルに達することのできたことを殊更にうれしく思う。艇庫焼失のために、部の存続すら危ぶまれていた状態の中で、関係各方面の尽力、特に秋艇会（ボート部OB会）を中心とした先輩各位の献身的な募金活動により、一クラブのものとしては全国でも屈指の艇庫が建設された。爾来、部員一同は漕艇部の伝統に新しい息吹きをふきこむことを使命として、彼等なりの最善の努力をはらってきたものと評価している。

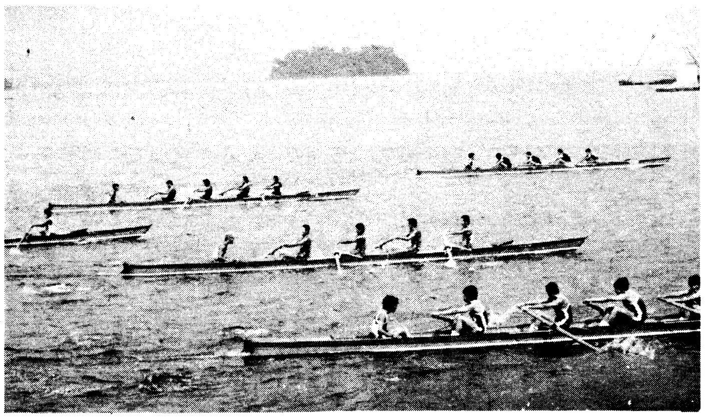
今年のクルーは昨年度の県体の時に「打倒本荘」を合言葉に結成された。しかし、当大会では大敗を喫し、その壁の厚さをまざまざとみせつけられた。その後、その力量・経験不足を補うための秋季の乗艇練習、冬季には基礎体力の養成を目途とした陸上でのトレーニングとほぼ予定通りに計画が消化されていった。特に漕艇競技の生命であるチームワークも主将・三年生を中心としてよく練成され、春には相当期待のもてるチームに成長していたように思う。しかし、今年の好成績もここ数年の戦績からみれば、偶勝ち得たものであり、まぐれの感は免れない。本校漕艇部の真価は偏えに今後の部活動の如何にかかっているのだということを銘記し、一、二年生には更に一段の飛躍をめざして厳しく精進することを期待している。

今年の全国大会出場に際してのOB各位のご芳情、日頃の秋艇会のご指導、ご援助に厚く感謝申し上げるとともに、今後一層のご支援のほどをお願いしたい。

（漕艇部顧問　高田屋敏夫）

五十二年度戦績

・県内大会
中央地区総体（五月）一位
全県総体（六月）一位
県民体育大会（七月）一位
・東北大会（六月）―福島県荻野　初優勝
・全国大会
全国高校総体（八月）―鳥取　七位
国民体育大会（九月）―青森　準決勝進出



昭和52年度　全国高等学校総合体育大会

（漕艇競技）　昭和52年8月4日～　　於米子市

× × ×

終業のベルが鳴ると同時に自転車置場に走り、雨の日にはブレーキの効き具合に注意しながら鷲坂を降りて向浜まで。全員が集合して練習艇を秋田運河に浮かべる時は四時十五分をまわっています。練習が終わると既に七時を過ぎており、家に着くのは八時、夕飯をすませて、さて勉強でも始めるかと思っていたのが、気がついてみたら朝という日もよくありました。睡眠は充分ですからクラスの仲間より目は冴えています。そのかわり予習ができてませんから恐怖に襲われます。何といっても秋高は進学校です。

このような練習生活は九月までの六カ月間です。この期間にクラブ活動においては比較的良い成績を収められましたが、その理由をこの期間だけからみつけることは無理です。私があげるとすれば第一に整った設備、第二に効果的な冬季練習、第三に諸先輩のご協力、の三点にしぼられると思います。

●第一点の整った設備について。

われわれ現在の三年生が入部した年の春、現在の艇庫が向浜のスケートリンク横に完成しました。入部して初めて行った艇庫はあの火災の跡地に建てられた小屋でした。中に入ってひと驚き。立派な艇が横たわっている。上級生から、この新しい艇も、これから移る新艇庫も全部同窓生・在校生・その父兄の皆さんの寄付によって購入・建造できたのだと聞かされました。あれから三年、艇も三ばいにふえて下級生の乗艇練習も可能になりました。その他、懸垂棒なども取り付けられて体力増強にひと役かっています。設備と成績は密接な関係があると思います。

●第二点の冬季練習について。

卓球やサッカーを「調整」と称して数多くやったことが思いだされる冬季練習ですが、この出来不出来が次の年の成績を左右するのは確かです。練習計画は前年のものを踏襲しました。ランニングとバーベルによるサーキット練習が主体です。しかし、この練習を持続することさえおぼつかなかったのです。それゆえ部内にはいらだちから自己批判の声が渦まいていました。それは勝たなくてはいけないという意識の現われでもありました。しかし時には漕法に関して議論を闘わせ、また軍手をバーベルの錆で汚しながら、三月下旬まで横道にそれることなく着実に技術と体力を養っていきました。部員全員が絶対に勝つことを確信し始めたのも、四月の乗艇練習が始まる頃でした。

●第三点の諸先輩のご協力について。

ボートに限らずあらゆるスポーツをマスターするためには先人の指導は欠くべからざるものです。われわれのあげた成績はひとえに諸先輩のきびしい御指導の賜であると言っても過言ではありません。なぜならボート競技ほど自分のフォームの欠点を知らずにいることによって起こる失敗・危険の大きい種目はないからです。また、合宿のときにいただいた差し入れ、さらに全国大会出場にあわせて集めていただいた寄付金など枚挙のいとまがありません。

以上三点、例年になく良い条件が揃い、加えて良い成績があげられたことを嬉しく思っています。

こんなわれわれに対する暖かいご声援、誠にありがとうございました。

（三年　佐々木潤　記）

野球　雪辱ならず

昨夏、奥羽大会では準優勝を飾ったが、あと一歩のところで甲子園の道は断たれた。それだけに今夏は組合わせ抽選の決まったその日から"打倒能代"を合言葉に部員一致団結、一歩を乗り越えようと頑張った。今年は打撃のチームと言われたが、僕たちはチームワークを身上とした。だからこそ取られたら皆で取り返すんだという気持ちがプレーに現われ、打撃のチームと言わしめたのだろう。

七月二十一日、対横手工高。戦前の予想では誰もが秋高有利と言った。侮らなかったと言えば嘘になるだろう。能代にだけ焦点を絞っての練習―始めから動きが鈍く気迫に欠け逆転された一幕もあったがようやく勝利を手中にできた。

七月二十三日、対能代高。抽選以来、二十日間にわたる対能代特訓の成果を発揮すべき日が来た。相手は本命、こちらダークホース。有利を打ち崩すのに皆躍起になっていた。始めリードしたものの追いつかれ、逆転。最後の最後まで全員一丸奮闘したが結果は僅少差で敗退してしまった。

そして秋、新人戦。新チーム編成後二カ月足らず、条件は同じ、わがチームは残ったレギュラーが五人。意気新たに練習に励んだ。そして宿敵秋商、難敵本荘を潰し、粘る秋商に凱歌をあげたのである。

つぎは全県征覇である。只いずれ相対するであろう能代を倒して全県優勝を果したい願望だけ。

二回戦、合川高と対戦、苦戦ながら突き放して勝った。

準決勝。これを叩かなければ道は開かれない。雪辱戦でもある能代高と対戦。是が非でも勝ちたい。全員張切っていた。試合は終始押し気味ではあったが、あと一発が出ず、自軍のエラーも重なり惜敗に終った。

ことし一年、勉強したことは、チームが試合をするのだと言うこと、技術以前に気迫に満ちたプレーであること、どんな相手にもベストを尽くすことなど、貴重なことを学んだのであるが―重要な今後の課題ともなるであろう。

長いオフに入ったが、能代に敗れた屈辱感を忘れないで、来春からは激しい闘志を叩きつけ、ぶっつけて念願の甲子園出場が成るよう頑張りたい。

（野球部主将　斎藤頼太郎）

哀悼

岡野陽一（昭48卒）於秋田　52・1
高橋　司（昭47卒）於秋田　52・4
高橋幹雄（旧職員）於秋田　52・6
榊田　勲（昭20卒）於本荘　52・7
佐藤俊雄（昭14卒）於男鹿　52・7
山本時男（大12卒）於名古屋　52・8
山下　晶（昭43卒）於秋田　52・10
畠　兵治（明44卒）於能代　52・11
秋元秀一（大11卒）於秋田　52・11
早坂啓堂（昭27卒）於平鹿　52・12

かとう歯科医院
加藤二郎（S38卒）
秋田市広面字野添一一六
TEL(34)0505

株式会社藤井材木店
藤井雄吉（S38卒）
秋田市川元小川町四の一〇
TEL(62)3318

秋田瀝青株式会社
専務取締役
斎藤豊通（S33卒）
南秋田郡飯田川町下虻川字上谷地一六
TEL〇一八八七七―四一〇三

和光薬品株式会社
取締役社長　高橋鎌治郎（T15卒）
取締役副社長　小泉憲雄（S21卒）
専務取締役　下山彰一郎（S27卒）
常務取締役　加藤義夫（S31卒）

歯科アキタクリニック
院長　武蔵貞司（S30卒）
秋田市山王一丁目九―一八
TEL(23)8810

総合スポーツ用品
竹半スポーツ
専務取締役
竹屋直太郎（S42卒）
取締役営業部長
大野日出治（S38卒）

たかはし歯科医院
高橋是崇（S30卒）
秋田市中通三丁目四―五八
TEL(33)2322

石田歯科医院
石田達也（S22卒）
秋田市南通亀ノ町五―七
TEL(32)5482

赤坂皮膚・泌尿器科医院
赤坂哲次郎（S29卒）
本荘市出戸町字岩渕下三―三
TEL(3)2261

米谷耳鼻咽喉科医院
米谷卓三（S29卒）
秋田市将軍野南一―一〇―一七
TEL(45)7120

社会・労働保険事務処理
各種年金・労務の相談
品田労務管理事務所
社会保険労務士
品田福男（S35卒）
秋田市土崎港東二丁目3―2
TEL(45)0428

千葉歯科医院
千葉正人（S18卒）
千葉正明（S44卒）
秋田市千秋矢留町六番一二号
TEL(32)2438・(35)8102

豊間歯科医院
豊間隆（S30卒）
秋田市土崎港中央二丁目五―一四
TEL(45)1657

佐藤画伯から「ポピー」の絵

―研修会館三階日本間へ―

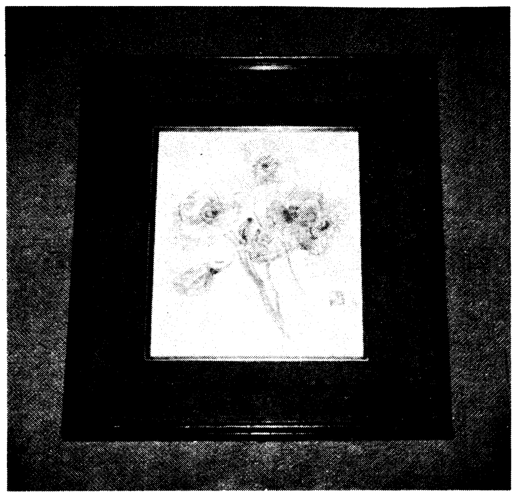
新世紀美術協会委員佐藤文雄画伯（T12卒）が七月二十九日、母校を訪問され、梶原教頭、小西達四郎同窓会理事と懇談した。

母校創立百周年を祝って寄贈していただいた八十号の大作一枚を同行の奥様、娘さん、大学生の二人のお孫さんに見せたいとのことなので研修会館にご案内する。

階段のおどり場に「作品B」、三階の第一研修室に「作品A」が掲げられている。いずれも独特なデリケートな作品で、研修会館を利用する生徒たちに喜ばれているものである。

同じく三階の第二研修室（日本間で、家庭科の授業や茶道部の稽古、その他の小集会に利用されている）で、一休みし、眺望を楽しんでいただいてから、小体育館二階の小さい作品をお目にかけたところ、佐藤画伯は、「これは三十代の作品だ」と驚かれた。

帰京されてから、小西氏を通じて一枚の色紙が届けられた。三階の日本間の壁面が寂しいから掲げるようにとの伝言である。



作品は「ポピー」、茶道部員たちはまるで自分たちがいただいたように喜んでいる。これで佐藤画伯のすばらしい作品は母校に四点あることになるのである。

佐藤画伯はこの十月、銀座で個展を開かれた。素描に淡彩を施した花の小品展で、七十三歳とは思われぬすがすがしさと好評であったという。

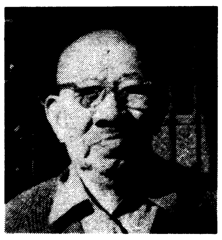
東南アジアやタヒチをたずねて南方の植物に魅せられたという画伯のやさしいお心を思えば、生徒たちも一層、「ポピー」を大切にしなければなるまい。

なお、佐藤画伯は、「近いうちにふるさとの秋田市でも個展を開きたい」とのことである。

みずみずしい作品を、まとめてたくさん拝見したいものである。

佐藤六蔵先生

この十二月七日で満90歳



われらの敬愛する「ロクチャ」佐藤六蔵先生はこの十二月七日で満九十歳を迎えられた。

明治四十一年三月卒の大先輩である先生は後輩である生徒のわれわれを心からいつくしんでくださった。先生にことばをかけられ、教えられ、なぐさめられ、力づけられて、うれしい思いをして忘れることのできない教え子は、どんなに多くいるかわからない。先生の存在は、人間の善意のあかしであると言ってもいい。

その先生が満九十歳を迎えられたのを機に、お世話になった者たちがお祝いと感謝の気持ちを表わすことになった。

前にはよく散歩姿の先生にお逢いしたが、最近ではお宅にこもり勝ちのご様子である。

小玉孝次郎氏を発起人代表とする「佐藤六蔵先生謝恩金募集委員会」では、広く、教え子の皆様のご協力を、左記のようにお願いしている。

記

一、募金　一口参千円

一、送金方法

○振替　口座番号・五五五

校史資料

新資料発見に狂喜

本校に関する古い校史関係資料は明治10年の太平学校火災、度重なる校舎移転、特に昭和20年9月占領軍の突然の校舎接収による諸帳簿分散、校舎内にあったものは占領軍の校舎焼亡で灰燼に帰し、そのほとんどが散逸してしまったものと信じられていたため、「秋高百年史」編纂事業は先ずその資料収集から始めなければならず大いに苦労した。夏休、冬休も返上して連日のように県庁の地下書庫や県立図書館などでの資料探しに夢中だった。

ところが全く偶然に先日貴重な資料が校内から十数点発見された。生徒を督励してクラブ、同好会の部室、物置など整理させていた折、2A前階段下の空間を利用した真暗い狭い物置の一番奥に塵だらけの古い大小の木箱各一、茶箱二を発見した。生徒たちの同好会のガラクタをしまっていたものと思い、おって処分するつもりでひと先ず屈強な生徒をえらんでヤケに重いヤツを職員研修室へ運ばせた。大きい方の長持みたいな箱のふたを開けてみると、昭和20年から26年頃にかけての事務の会計諸帳簿がギッシリつまっている。資料としては大した価値はないと思いつつ、それでも何となく予感があって茶箱の方を開けてみた。上に重ねられていたやはり22年、23年当時の授業料徴収簿などを取りのけてみると、黒い部厚い製本したヤツがある。思わず心臓がゴトリと鳴った。「校友会誌自第一号至第十八号」（第一号は明26・1・31発行）「校友会誌自第十九号至第三十号」である。全く偶然の発見とはいえ、正に我々としては狂喜乱舞の思いである。これらは「同窓会だより」第3号でも同窓各位へ「秋高史の根本資料"羽城"をそろえよう」と呼びかけた現在に至るまで発見されないでいる古い「校友会誌」なのだから。

"……現存する最古のものは第15号で、創刊号から第14号までまだ発見されていない……16、17、21、22、24、25、26、29、30、31、39～52……"

それが思いがけなく一挙に第1号―第30号まで完全な形で発見されたのだ。

更に古い型の赤茶けた木箱をこじあけてみた。これも大変なものである。大正期以後の同窓会の記録でいっぱいである。大正9年の50周年記念式典関係帳簿、大正10年の七年制高校設立趣意書と関係書類、60周年（昭8）記念祝典関係書類（2593と紀元年号を彫ったまだピカピカの記念ナイフと校章を月桂樹でかこんだデザインの記念メダルも同時に発見）、昭和9年の東根小屋町校舎改築、移転当時の期成会の詳細な記録、写真の類、当時の同窓会の大きなツゲのハンコ、それに「同窓会報自大正四年至昭和八年」の完全製本である。まさにこの箱の中のものは同窓会第一級の宝といえよう。

また別の茶箱からもドキドキするような貴重なものがみつかった。「秋田中学校史料」である。昭和5年10月30日、教育勅語渙（かん）発四十年記念に駒木根常次郎教諭（明40―大5在職）の調べた「秋田中学校敷地沿革史（明5―明15）、秋田新聞記者秀峰浅野武二郎調査の、「秋田中学校史料一、二、三」（明44まで）、「秋田中学校寄宿舎史料」（明23―明44）とを合本にしたもので有名な吉原資料の原材料になったものらしい。実に貴重な資料である。

その他「長官指令綴」（明15―明18）―時の県令より校長宛の指令をとじったもの―、「学校一覧」の合本（秋田県尋常中学校年報、秋田県第一尋常中学校年報、秋田県立秋田中学校年報など明28より大8まで）、図面が豊富に入っている「県有財産台帳」（明24―昭7）などは今後じっくりと調べてみたい大きな興味を呼び起させる。それに「秋田県通牒」（明26―明34）（明45―昭18）の二部の資料は知られなかった新事実の発掘の宝庫ともなりそうな貴重なものだ。時の政府（内務省、文部省、陸軍省）―県―秋田中学への一片の通達、命令書でもその行間行間にその時代の動きや、風雲ただならぬ様子がうかがわれるのもあってまことに興味つきない。

今その頁を繰ってみて特有のカビ臭さもむしろ快良い香りに感じられるから不思議だ。百年史編纂で苦しんでいたあの頃、これらが見つかっていたらと嬉しさのうち口惜しさが入りまじってくる。誰も今のこの校舎内にあったとは思ってもいなかった。迂闊といえばまことに迂闊、全くの僥倖の一瞬だった。

（小松　記）

創立百周年記念文庫 寄贈図書一覧

その5

花田緑朗（T9）○八木信雄歌集「浮生哀歓」○河田孝一歌集「北湖丹頂」㊟…秋中同期の友人の歌書ですが貴図書室に御所蔵いただき度いと存じますので…との書簡とともに贈られた。

丸ノ内久（S2）◎「社会主義と自由主義の間」＝ヨーロッパから日本を考える＝㊟昭和52年10月発行の最新刊。

豊田　武（鎌田永吉遺稿集刊行会代表）―◎『幕藩体制と維新変革』―㊟著者鎌田永吉氏は、手形字揃田において出生。昭和26年秋田高校卒業。東北大学大学院博士課程を経て文部省史料館に文部事務官として就任。上智・埼玉・法政大学などの文学部講師。国文学研究資料館教授に昇任したが、昭和51年急性白血病のため死去（享年四十四歳）―同書・鎌田永吉年譜による―

高橋彰三郎（現職員）○「学問のすすめ」。

秋田高校社会部　◎部誌『南暁』通巻30号。㊟本号は①鳥海村巡検調査記録。②共同研究（秋田湾開発や国際問題…）が主軸。③社会部史をみると、昭23年に社会科研究会として発足以来現在に至る。実地踏査を重ねること今年度で23町村に及び、寝食を共にしてのなまの研究記録はりっぱである。

進路委員会編　◎『みちしるべ』―先輩より後輩へ―第一、二、三合併号から第六号までの五冊。㊟副題のように、秋田高卒業生が在校生への激励やアドバイスの集録。六号の目次から順を追って紹介すると（名前省略）。▽一人ではない…山形大・横山▽秋高生諸君へ…慶応大・野尻▽気迫をもって…東京女医大・後藤▽身近な材料を生かすこと…東北大・佐藤▽自分の道を突き進め…お茶の水女子大・畠山▽はっきりした目標を持って…弘前大・館岡▽女も度胸…東京大・鈴木▽「これから受験勉強を」という人へ…秋田大(内)・牧▽成せば成る…北海道大・新野▽私の勉強法……東京大・榊田▽一年の壁…慶応大・石垣▽推薦入学の体験から…上智大(外)・細田▽編集後記。

狩野豊太郎（県理事・理学博士）◎「秋田県北部沿岸地帯の第四系」―秋田大学鉱山学部地下資源開発研究報告第36号別冊―。㊟同氏の学位論文である。

伊東教行（S47）○思想史の周辺○ナイル○倫理学のすすめ。他

鈴木左絵子（S52）○第二次インドパキスタン戦争。○恍惚の人○時と次元の彼方から。共六冊

佐藤克之（3H）○「黄昏のロンドンから」。

加藤安巣（3H）○「数学の学び方・教え方」。

◆その他の寄贈図書から◆

「鯱光百年史」859ページ。昭和52年10月発行。愛知一中創立百年祭実行委員会（旭丘高校内）。

「教科書訴訟十年」家永三郎著。219ページ。ほるぷKK。

「証人尋問聴取書」（証人西部陽子）金沢地裁損害賠償請求事件内容…スモンの病因・医療・患者の救済・ウイルス説への迫害を証言。内外の学説や研究資料を含む大冊。田辺製薬代理人。

「おしゃれの文化史」I IIの二冊。平凡社刊。資生堂美容研究所。

凡　例

- ●略　敬　称
- ●（　）卒業年次
- ●◎印は著書を示す
- ●順不同乞許

東北興産㈱
取締役社長　高橋政泰（S11卒）
取締役商事部長　渡辺博太郎（S17卒）
秋田市茨島四丁目三番二六号
TEL(62)5463

三皇堂製パン株式会社
代表取締役　平沢孝一（S29卒）
☎秋田市牛島東一丁目二の五
(32)5845・(34)4376

秋田共立病院
院長　小泉春雄（S26卒）
秋田市南通亀ノ町六
TEL(33)2541

秋田第一ホテル写真室
滑川　啓（S29卒）
☎秋田市広小路秋田プラザ内
(34)1141(代)内線284

外科　胃腸科　皮膚科
柳田医院
柳田英治（S21卒）
秋田市手形田中四番一五号
TEL(33)7268

結婚式場と披露宴会場
大広間　全館秋田杉の美しい木目に包まれて東北一の大宴会場として大庭園を前に、その美しさは絶賛されております。（最大収容 400人）
国際観光日本レストラン
割烹　あきたくらぶ
伊藤民雄（S35卒）
秋田市中通5丁目2番30号
TEL(33)2101～3

秋田営林局
秋田高等学校同窓会
会長　桂田龍衛（S21卒）
副会長　佐々木巳喜雄（S21卒）
副会長　原田亮吉（S23卒）
幹事長　熊谷　弘（S28卒）

株式会社　羽後銀行
取締役頭取　塩田雄次（S5卒）
常務取締役　佐藤　彰（S19卒）
取締役営業部長　千田達彦（S20卒）
業務部長　竹谷秀夫（S23卒）
人事部長　三浦礼司（S25卒）

秋田高校同窓会秋田県庁支部
名誉顧問　小畑勇二郎（T13卒）
顧問　出口廣光（S18卒）
〃　酒井　淳（S17卒）
〃　北島芳二郎（T9卒）
〃　丸山　完（S19卒）
〃　土田　清（T14卒）
〃　宮田正彦（T13卒）
〃　武田　暢（S16卒）
〃　今村久吉郎（T10卒）
〃　沓沢尚之（S16卒）
支部長　後藤孝一（S18卒）

秋田高校同窓会
秋田市役所羽城会
会長　田中義郎（S12卒）
副会長　鳴海健治（S12卒）
会員一同

随想

秋中時代の教え子

近成多一（大5～9）

秋中時代の教え子では、なんと言っても赴任して初めてお付合いした――わずか二学期間だけでしたが――大正七年卒業の皆さんが一番親しみが深く、お名前は勿論お顔までほとんど残りなく記憶に留めています。すでに故人となられた伊藤（秀雄）君とは同君の晩年、週に一、二回の程度で頻繁に文通したものです。一級下で中途退学の同じく故人安達（一郎）君とも肝胆相照らした（？）仲。今もお元気で時々お便りをいただく秋田市在住の方といえば、大場君と小山田君くらいのもの、前者はたびたび得意の風景を贈ってくれられ、後者は以前、言語に絶したビルマ敗走の力作手記『星落ちる日の記録』を恵贈され、言い知れぬ感動をもって味読したこともあります。一級下の大正八年卒組の文通仲間には、能代の柳谷君あり、東都現住の飯島君、ずっと近くには芦屋に海輪君がいます。なお前記伊藤、安達両君のご遺族とは今なおお互いの音信が絶えないでいます。学窓を出られて以来、ずっと以前から当京阪神地方に在住されている――あるいは、いた大正七年卒の方々四、五名は、毎年のように秋中同期会を開かれ、その都度私を招んでくれ、お互いに健在を祝し合い、昔話に花を咲かせてきたものですが、最近はそのお集りも間遠くなっていましたところ、この一両年のうちに大塚、町田、加藤の三君がバタバタとあの世へ先行し、残るは田中君ひとりきりになりました。田中君は当地方ただひとりの生残りになっても、これまでたびたびご酒肴ご持参で拙宅を訪ね、その都度堂に入った謡曲をうたって聴かせてくれるなど孝行息子の役割まで勤めてくださる、私にとってこの上もない貴重な存在ですが、私の方でも同君のご厚意に甘えすぎてはならぬと自分自身に言い聴かせている次第です。

謡曲のことを言えば、私自身も秋田在住中、鉄道の保線事務所で鉄道関係の人達によって定時に勉強会がもたれていたのに誘われて仲間入りをし、隔週一回くらいでしたか、教わりに出て、さよう、二十番ばかり上げましたカナ。結局性がわるくて物にはならなかったですが、でも経験というものは物になるならぬを問わず、余裕さえあれば、してみて万更無駄にはならぬもの、何か予期せぬ余得といったようなものが必ずあるものです。

秋田時代の私はまだ台所に酒瓶を備えおくほどの酒好きではなかったが、甘い物なら大好物。川反の銀細工屋のアンビン餅をよく買ってたべると話して、剣道の手賀先生に甘い物に対する私の味覚の素人ばなれしているのを賞められたりしたものです。これは高等学校に在学中胃を散々に壊して死線をさまよった経験のたまもの！そこで「治る病気はした方がよい」というのが私の持論。つまり懲りてそのあとからだを大事に扱うようになるから、というわけです。およそ消化器に関する限り私は私自身独特の健康を編み出していて今では教え子の胃肝病の大家を前において彼らをして傾聴せしめるに足るようなお説教をするほどです。

秋田を離れてずっと後、安達君が贈ってくれた自家製の笹巻が大そう気に入り、賞めてやったところ、「先生が死ぬまで毎年送る」と申して、約束通り十年以上も毎度大量に頂いているうち、安達君自身の方が先に死んでしまいましたが、令息があとをうけ引続いて送ってくれられていたところ、今度はご母堂の一郎君の奥さんが他界されたので、もうこれ以上お手数をかけてはあいすまぬと当方からご辞退申しあげ、昨年度を最後に懐かしい笹巻にいさぎよく訣別しました。

秋田特産の菓子なら、なんといっても炒り小豆製の諸越が最高と決めています。

秋田は日本海に面しているだけあって魚介類はすこぶる豊富。瀬戸内ものに比して大味といわれはするが、私の口にまずいというようなものは何一つなかった。ハタハタ鮨さえその珍しさを愛でた。皆さんがよくお弁当の菜として学校に持参された、あのこんがり焼いたボタを皮ごと食べる味！酒の友として絶好の生鮭の頭の酢のもの、これは現に今もわが家の食膳にのぼらせている。鱈の白子のお吸物、炙った鮭の身をほごして包み海苔で外を巻いた大おにぎり。ショッツルは秋田を去ってから後、岡山の学校で同僚となった飯島君の宅で初めてふるまわれて、その珍な渋い味にその場でたちまち魅了された。およそ秋田独特の郷土料理でベリーウエルカムとこないものはなかった。

日本一の森林県だけあって、マキをぜいたくに使った豪勢な冬の教室のストーブ、雪に埋った学校の中庭、草ぶき屋根からさがった大ツララ、楢山広場の草原の眺め、金照寺山の栗拾い、千秋公園の散策、太平山の展望――思い出ぐさを数え上げれば果てしがない。私にとって一粒だねのむすめをもうけたのも秋田市で、皆さんが卒業された大正七年の九月のことであった。彼女は現に郷里岡山市に健在ですが、もはや満五十七歳のおばあさんです。

Far Away & Long Ago.

秋田は今も私にとって遠く離れたくに、私の秋田時代ももはや六十年近い昔となってしまいました。

老いさらぼうてなお生活難や人間関係のうるささ煩わしさに思い悩む折りなど、昔恋しく懐かしい秋田のどこかの片隅に身を寄せて犬か猫でもあるかのように、唯独りそっと自然さながらの安楽往生が遂げられたらと思ったりしますが、ぜいたくな思い上がりというものでしょうか？。

老人の行く処なし雲を見る。
（伊藤秀雄君晩年の作）

〒663
西宮市下大市西町一〇―一五

「随想」の原稿は、二〇〇字詰用紙七枚程度でお願いします。四〇〇字ならば、三枚半程度になります。なるべく顔写真を添えてお送りください。詩歌、川柳などもお寄せいただければ幸甚です。掲載順序等はお任せくださるようお願いいたします。（係）

回想の一断面

石田秀一（S13卒）

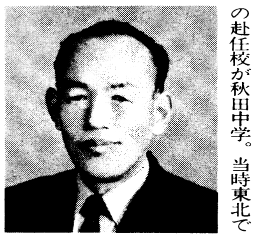
教育とは何かが新旧制度を対比して論じられるが、感傷や早トチリが多い。教師と生徒及び生徒間のコミニケーションを考えると、我々は秋中時代を誇りに思う。全県から集った二五〇名が顔も性格も熟知する様になって五年間を共に過した事は極めて有意義であったと言える。我々は昭和八年に入学、六十周年行事があり、翌年古村教頭が去り玉木校長時代が始まる。カリスマ的声望のあった古村先生の後だけに、校長は意欲を燃して、新しくアブラ（申訳ないが御名前が思い出せない）先生を教頭に迎え優秀な教師を集めて校風躍進を期せられた。学力向上に幾多の手をうたれたが、最大の力となったのは学識と情熱に裏打ちされた先生方の意気込みが教室内に満ちあふれた事であろう。どの先生も全校生徒の名前と顔を知って居られて廊下でも気軽に話しかけられた。岸本先生はフランス語やラテン語にも言及されたし、井上先生はテークに盗むと云う意味があるかを真剣に生徒と論じられた。山下先生は東大の学生時代を語り、豆パンとアダ名された半沢先生はアンパイヤをアンパン官と訳してしばし苦笑された。佐々木三治郎先生は教鞭ならぬ長い教竿をふるわれた。その他の諸先生も特色のある講義をされ、黒板の字や語り口を今でも思い出す。落第が多くて卒業は約二百名であったが、四年から約十名、五年から約二十名が旧制高校や北大予科に合格し、学校の所期の目的は果された訳である。（どうでもいいことだが十五名が東大に進んでいる）。各学年には夫々独自の気風みたいなものがあるが、我々は五十回とも五十一回とも異っている。現在生存約百二十名、死亡約六十五、約と言うのは消息不明等の為である。戦争や戦後の苦闘の中で死んだ者の面影は何時迄も若く悲しく胸裡に刻み込まれている。甲子園に出場した大門、伊吹、中村、特攻機で体当りしたハンサムな本郷充雄、古村先生の長男隆一、岸本先生の長男滋、岩手大の教授になった三神悌次等々惜しい仲間が死んでいる。最後の瞬間彼等の胸中をよぎった思いは何であったろうか。

現存の中では母校の大槻事務長、県教育界の菅原繁雄、吉井忠亮、加藤周二、小島敏夫、藤原義正、印刷業界理事長宮崎金一、魁の鈴木哲郎、山田芳武、京野友三、日吉神社の石沢久英、国立工専の横江剛一、写真の河村周吉、鉱山学部教授の高安泰助、県外には東大教授佐藤久、独協医大教授本間道治、岩波書店の栗原一郎等とても書ききれないが、傑い奴は殆ど県外で活躍している様である。政治家は一人も居ない。来年は卒業後満四十年である。

その頃の秋田中学

寺島光雅（昭7～10）

昭和七年三月、広島大学文科三部（地歴専攻コース）卒で、最初の赴任校が秋田中学。当時東北で仙台一、二中に次ぐ名門校と知り喜び勇んで着任した。



根小屋町の十七連隊の後方に建つ秋田中学は、ガランドウの古ぼけた校舎にまずびっくり。二階建てのお粗末な校舎で、長い冬などヒューヒューと吹きすさぶ北西季節風に、先生も生徒もふるえあがった。

しかし、教育は校舎の優劣にはかかわりない。県内各地から、この老校舎の秋田中学に憧憬の念を抱いて、われもわれもと若き学徒が集まり、名実ともに秋田一中の観を呈した。

私の着任当時の学校長は小野先生、次いで玉木校長。この両校長をよく補佐して、同窓の名教頭古村先生がテキパキと校務を処理されていた姿が今も目に浮かんでくる。

いきなり腕白ざかりの三年生の学級担任。今私のところに当時の記念スナップが四、五葉。生徒一同、それぞれ個性豊かな顔かたちは判然たるも、今は昔、生徒個々の氏名が浮かんでこない。

同じスナップの思い出は、私が陸上競技部長として、旧制山形高校の大会に、二年連続遠征を試みた面影。実は私こと、中学、大学在学中競技の世界には全く無経験ズブの素人。それが、ご温厚そのもの、当時体育部長の伊達先生からのたってのご依頼で部長を引き受けたもの。幸い本大会で秋中選手が四百メートルレースにみごと大会新記録で優勝し、秋中競技部の名声を高からしめ、どうやら部長のメンツも立った次第。

学年が進んで、担任生徒を引率して修学旅行へ。当時、第一回卒の町田忠治先生が今をときめく民政党総裁。その頃、例年、旅行団は先生のご邸宅に参上、この偉大な先輩に微意を表するならわしがあった。先生も生徒の気持ちをかわれていつも歓待してくださり、一同大いに感激したものである。

当時、同じく先輩の田中隆三先生も町田先生と相伍してしばしば台閣に列しておられた。その頃の総裁、大臣は今よりもはるかに貫禄があったようだ。

さて、「同窓会だより」に学校林の現状がのっているが、これも歴史が古く、その頃、全校生徒一同杉の枝おろしなど、年一回遠足がてら出動するならわしがあった。

「恩師ご健在」の佐藤、岸本、山下、小島、佐々木、高山の諸先生、それに「随想」ご執筆の伊達先生は、私とは文字通り同期のさくら。なつかしくくりかえしくりかえし拝読。なぜならば、私は卒業したばかりのホヤホヤ、これらの先生方に一から十までご指導いただいたことであるから。

それにしても、ここで同じ地歴科のスタッフ佐々木三治郎先生のことども一言なかるべからず。当時千五百の在校生に、地歴関係は佐々木、及川先生と私の三人。佐々木先生には、その頃日本史解説の大著を公刊された直後で、その豊かな鋭い史眼をもって生徒を指導されていた。三人で本校の地歴教育の振興についてよく話し合ったことを記憶している。

私の高校長在任二十年間、例年五月末開催の全国高校長大会には岸本、石神、野口、井上幸次郎、橋本興一先生など、かっての秋中仲間がご出馬。その都度、時のたつのも忘れて歓談したものだった。

私は未だ一度も秋中のクラス会に列したことがない。これは、私の消息、現住所などの不明が素因であろう。この稿がご縁になって私のアルバムの中の担任生徒諸君に拝顔できることを心から願っている。

ここで私のあだ名を紹介しなければなるまい。それは「坊ちゃん」のような優雅なものでなく、自他ともにゆるす旧名「天海」であったはず。とかく名前負けすることを恐れ、二十数年前に「光雅」と改めたから今後お忘れなく。

今の秋田高校もお訪ねし、「恩師ご健在」の先生方ご一同様にも拝顔申し上げ、今日までの無音をお詫びいたしたい。

〒350 埼玉県川越市六軒町一丁目十八の二（電〇四九二―二二―一四六八）

秋高の音楽家

佐々木竹治（T15卒・昭30～41）

秋田中学時代と秋高になってからの音楽教師は、宮越精三郎、小田島樹人、小生となったが、故古村先生は昔、音楽教師はあったといつか話されていた。

ここいらで秋高出身の音楽人をみると古い所で大正五年卒の東海林太郎。宮越精三郎は大正十年卒。小生より一年先輩の新屋出身の深井史朗は、映画音楽に、音楽評論にその尖鋭の論説で、甚だ日本で特異な存在であった。

映画「忠臣蔵」「佐々木小次郎」「大阪夏の陣」「土に生くる」「大菩薩峠」の音楽は彼の作曲である。石田一郎は、私たちが秋中で漢文を教わった故石田直太郎の息子で、現在も作曲活動をつづけている。

現役では、教え子たちが中央で活躍している。小野崎耕輔、同通男、同充（N響）、野口力（よみうり交響楽団）、弦楽の前田直、藤原義章、声楽の松本耕次郎、管楽器の菊地保男、指揮の佐藤菊夫などがある。

私たち、土崎から通学した汀友会会員の先輩に、秋中の応援団長加藤トラチャ、村山吉郎、藤田溪山、本荘谷慶次郎、大淵仁右衛門、菊地栄一、其の他すぐれた人々が多かった。

学生時代の先輩たちの行動は、直接我々後輩たちに深く浸透して、まことに青少年の意力は、この時期に定まるようで、鉄は赤いうちに打ての感がする。小生も母校で十数年間、教師をやり、十人十色の生徒の個性を長く見つづけてきたが、良く出来た生徒は町であっても案外つめたく、よく叱った生徒はあたたかくあいさつしてくれる。このことは大人の成長度によってきまるようだ。

余生いくばくもない小生に、秋高卒業生の同期会が時々招待してくれる。三〇、四〇代の若い気迫に自分も若返るような気がする。

事務局だより

六月三日　東北肥料羽城会総会
六月十一日　第62期（昭23卒）同期会
六月二十七日　東京支部総会
七月九日　大曲・仙北支部総会
七月十三日　緊急常任理事会
七月十六日　常任理事・年次代表者会議
八月二十七日　昭和52年度定期総会並、役員会
九月三日　常任理事・年次代表者会議
九月十九日　年次代表者会議
十月二十二日　能代・山本支部総会
十一月十一日　近畿（大阪）支部総会
十一月二十三日　本荘・由利支部総会
十一月二十六日　若菜会（女子会員）総会
十一月二十九日　紫仁会総会
十二月一日　秋田県庁支部総会
十二月三日　秋田営林局同窓会支部総会
十二月十二日　湯沢・雄勝支部総会

◎尚、毎度のお願いですが、住所職場変更の方は、速やかにハガキにて事務局へお知らせ下さい。

おわびとお願い

○「随想」欄に、近成多一先生と寺島光雄先生から玉稿をいただきました。いずれも、心のこもったなつかしい作品です。しかも相当の長編でした。なんとかして全編を収録したいと願いましたが、どうしても長すぎました。年二回発行の「同窓会だより」としては、分割して連載しても間があきすぎますし、また、集まった原稿を並べて追い込みにする小冊子型式ならば問題はないのですが、一応タブロイド版の新聞型式をとっている「同窓会だより」としては、秋田弁で言うと、ハバケてしまいました。

進退きわまった編集係一同は、両先生のお叱りを覚悟し、また、読者各位のお怒りも甘受することにあきらめて、まことに失礼きわまる無暴なナタをふるってしまいました。どうしても両先生の文章を掲載したかったのです。伏しておわび申しあげます。

両先生のご海容をお願いすると共に、今後とも玉稿をたまわりたく、よろしくお願いいたします。

○無から有を生じて発行を続けている「同窓会だより」の唯一の財源は広告であります。また、新聞にとって広告は紙面構成の上からも欠くべからざるものとも言われています。まして本紙の広告はそれ自体がなつかしい読み物でさえあると言えるでしょう。ご迷惑をかけてはと、なるべくダブらないようにお願いはしていますが、広告集めも楽ではありません。どうか積極的なご協力をお願いいたします。何年単位での毎号広告もご予約願えれば幸甚です。ご希望の方は事務局までご連絡ください。

へんしゅうしつ

「だより」第五号をお届けします。例によっておそくなってすみません。会員の皆様の熱意をジカに感じながら仕事をしています。どうか大小にかかわらずご教示のほどお願いします。

寒くなってきました。お元気によき年をお迎えください。